

ポルトガル人ドミニコ会修道士ガスパール・ダ・クルスの見た一六世紀華南

——『中国誌』再刊のための全面的再検討——

日 埜 博 司

目 次 (本誌には*印を付した項目を収載する。◎印を付した項目は『流通経済大学論集』第36巻第1号に、○印を付した項目は『流通経済大学流通情報学部紀要』第6巻第1号にそれぞれ掲載した)

◎訳者序

書誌的考察

◎原著者略伝

◎凡例

翻訳

◎印刷者への緒言

本書への緒言

◎読者への注意

第一章 ここでは著者がなぜチナへ行く気になったか、その動機が述べられる。このチナの名称について。またこの地方の呼称について

第二章 本章ではチナがいかなる地方であるか、またチナ人がいかなる人々であるかが示される

第三章 チナと境界を接する諸国について。本章ではチナの広大さに関する情報が与えられる。またアレマーニヤの果てと境界を接することが明らかにされる。本章でふたつのロシアについて論ずるのは、そのひとつがチナと境界を接するからである

第四章 本章においてはチナの周辺諸国についての問題を続ける

第五章 チナを分割する諸省について

第六章 本章においてはカンタン市(*)について詳細に論ずる

(*) 広州府

*第七章 内陸部にあるいくつかの建築物について

○第八章 本章においては国王の血筋に連なる者たちの邸宅の壮麗さ、そしてもろもろの高貴な市に住む為政者たちの官邸について述べる

○第九章 この地にある船舶と舟艇とについて

○第一〇章 土地の利用と人々の生業について

○第十一章 工芸職人と商人とについて

◎第十二章 この地の肥沃さと豊饒さとについて

◎第十三章 男性の衣裳と習慣とについて

*第十四章 チナ人の行なう数種の祝宴について。また彼らの音楽と葬儀とについて

◎第十五章 女性の衣裳と習慣とについて。またチナには奴隷がいるのかどうか

◎第十六章 諸省の官吏の数とその位階について

◎第十七章 いかにしてロウティアは選抜されるか。またその勉学について。さらにさまざまに異なる言語の中で会話によらず筆記によって相互理解の図れる次第

◎第十八章 ロウティアおよびその下僚たちに対する支給について

◎第十九章 ロウティアたちが奉仕されるに伴う迅速さと機敏さとについて

◎第二〇章 死刑を宣告された者たちについて。および裁判に付随するその他の事柄について。本章は著名なる一章である

◎第二一章 チナの監獄と牢獄とについて

◎第二二章 チナの国王は誰と結婚するのか。また大使^(*)について。国王はみずからの国の全土で惹起するすべてについての情報を毎月いかにして得るか

^(*)チナ国王への朝貢使節

◎第二三章 往時いかにしてポルトガル人はチナ人と交渉していたか。またいかにしてチナ人が彼らに対して武装したかについて

◎第二四章 いかにしてチナ人はポルトガル人に対してふたたび計略を仕組んだか。またこの計略から生じたことについて

◎第二五章 ポルトガル人がいかなる人々であるかを知らんとして払われた努力について。また彼らの投獄に関する審理がどのように行なわれたか

第二六章 本章は国王が下したかのロウティアたち^(*)に不利でポルトガル人に有利な判決文を含む

^(*)ルティシすなわち都司廬鏜と、アイタオすなわち海道副使柯喬

*第二七章 チナ人の祭祀と崇拜対象について

*第二八章 チナにいるイスラム教徒について。またチナにおいてキリスト教界を作るに伴う諸障害について

第二九章にして終章 五六年^(*)にチナ人がデウスから蒙ったいくつかの懲罰について

^(*)一五五六年

附録 パチャトゥルンシャと呼ばれるオルムス王国の王がアラビア語で編纂し、聖ドミンゴスの宗派^(*)の一聖職者が簡略化しつつ訳出した、オルムスの諸王の年代記およびオルムス市建設に関する記述

^(*)ドミニコ会

コインブラ大学総合図書館蔵『中国誌』初版本影印

葡文要約

英文要約

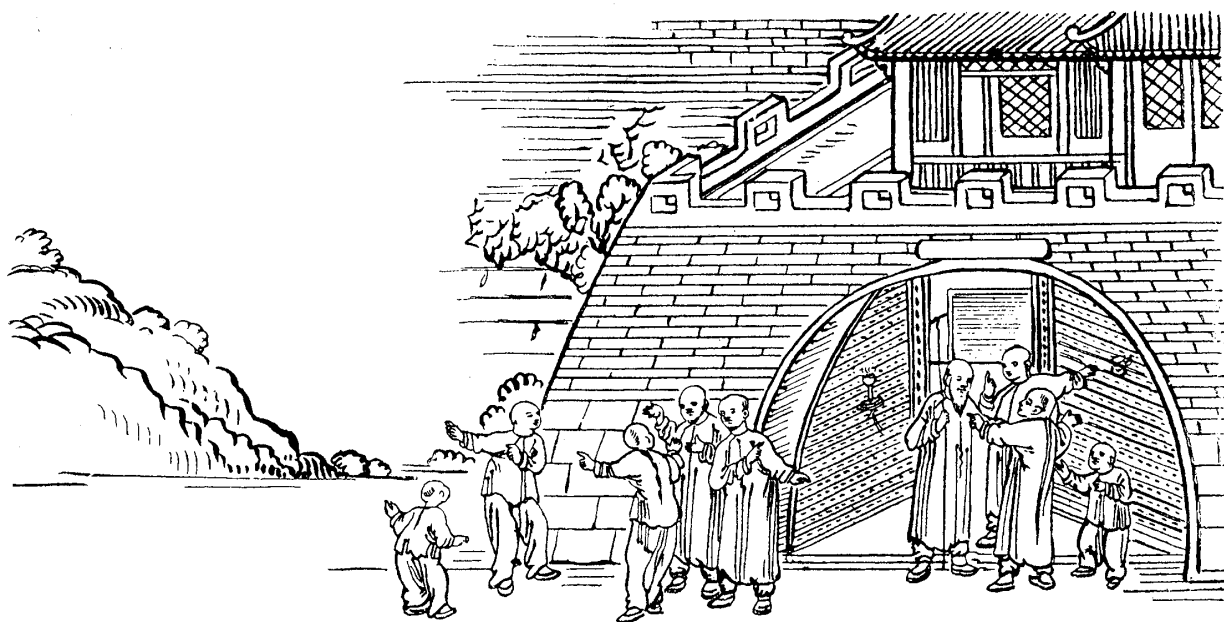
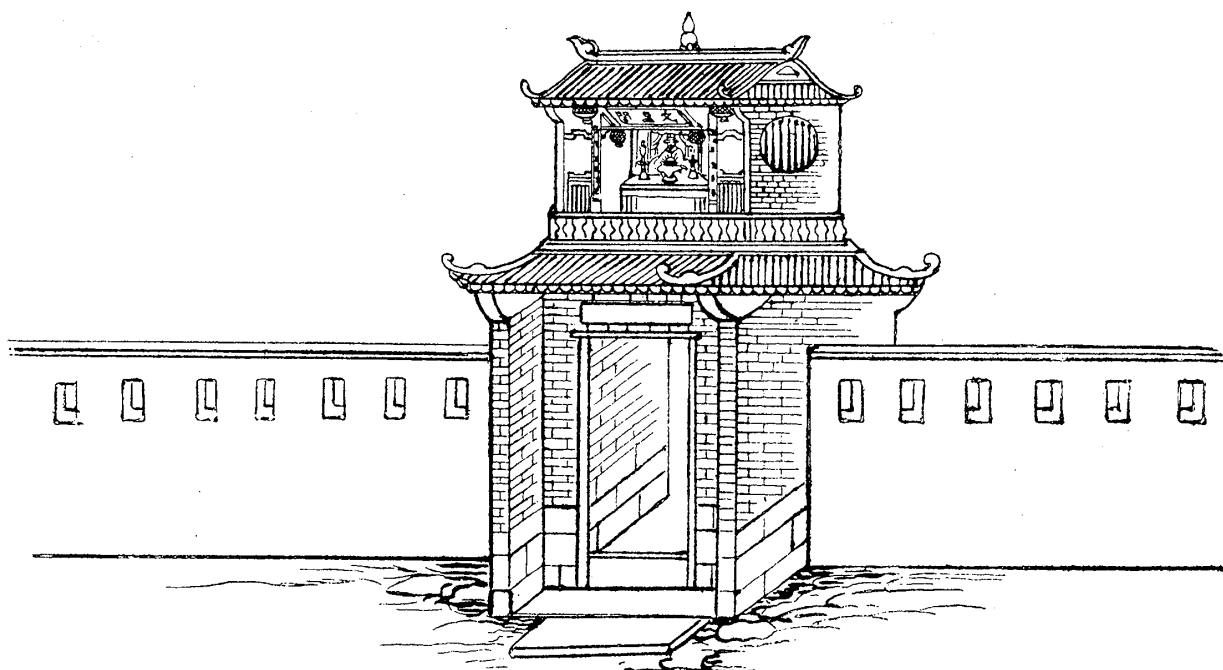
索引

引用参考文献

訳者後記

第七章 内陸部にあるいくつかの建築物について

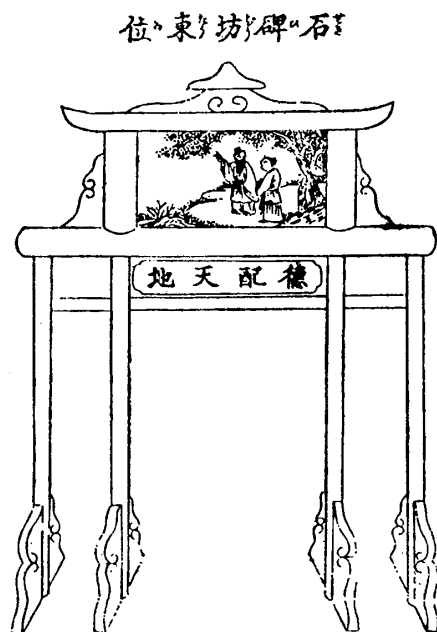
チナの都市の多くは、既述のとおり、カンタン〔広州〕よりもはるかに壮麗である。城門のあたりには、城壁上の歩道へ至る、石もしくは煉瓦製の、たいそう堅牢で、高く、しかも凝った細工の施された露台がめぐらしてある。城壁の上のほうにはところどころ尖頂があり、その全容は華麗なることこの上なく、都市を装飾しこれへ気品を添える点でこれ以上のものはない。大方の都市において城壁

城門 (J. H. Gray, *China* より)城壁に囲まれた村 (J. H. Gray, *China* より)

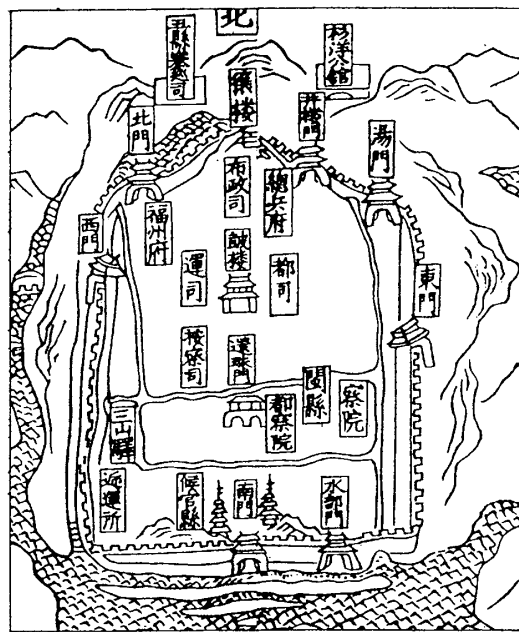
はたいそう幅が広い。したがって、その上を三～四人の人が横に並んで歩くことができる。ある諸地方においては、その上のほうに化粧タイルが嵌めこんである。いかなる城壁にも覆いのある露台や堡壘がめぐらしてあり、その堡壘にも必ず高い露台と尖頂がついている。全体的にも実によく造作ぞうさくされており、たいへん華やかである。都市を統治する連中はときどき時間つぶしにそこへ出かける。城壁の上のほうも露台もすべてそこに人が住めるように造ってある⁽¹⁾。

フチェオ〔福州〕市は、すでに述べたように、フケン〔福建〕省の首都であるが、その財務監督官〔布政使〕の官邸の門前には一見に値する塔がある。この塔は四〇本の柱の上に建ててあるのだが、その柱の一本一本がただひとつの石なのである。柱は八角方形で、それぞれの周囲は一二パルモ、長さはおおよそ四〇パルモ前後であろう。であろうというのは、ポルトガル人たちはその正確な長さを計測できなかったからである。しかし彼らにはそのくらいの長さはあるように思われた。これらの柱が上のほうで非常に大きくかつ太い梁に挿入され連結されていた。そしてその上にたいそう高くいたって美しい塔が載っており、これにはきわめて華やかなすばらしい造りの露台がめぐらしてある。ただし、こういう上部構築物〔塔〕など別段驚くべきものではない。チナ全土にはよく似た構築物がたくさんあるからだ。ただその基底部だけはどんなものであるか知っておく価値がある。なぜなら基底部を形づくる数多くの太い柱石はすべてが均質であるうえ、そのひとつひとつが継ぎ目のない石であるからだ。どれもこれも驚くべきしろものである。

主要都市の多くの、ことにその地を統治し支配する者たちの下船するところから財務監督官の官邸へいたる通りは、たいそう気品があるうえに幅が広い。騎乗した人が一〇人か一五人横に並んで通ることができるほどで、しかもその両側にはたいへんりっぱな差し掛け小屋が並ぶのである。差し掛け小屋には、大量かつ多様な商品を扱う商人多数が住んでいる。そのたもとで大量の果物やその他の雑貨が売られる。どの都市へ行っても、幅の広い目抜き通りには必ずこうした差し掛け小屋があり、上述したことのために役立っている。



牌楼（『清俗紀聞』より）

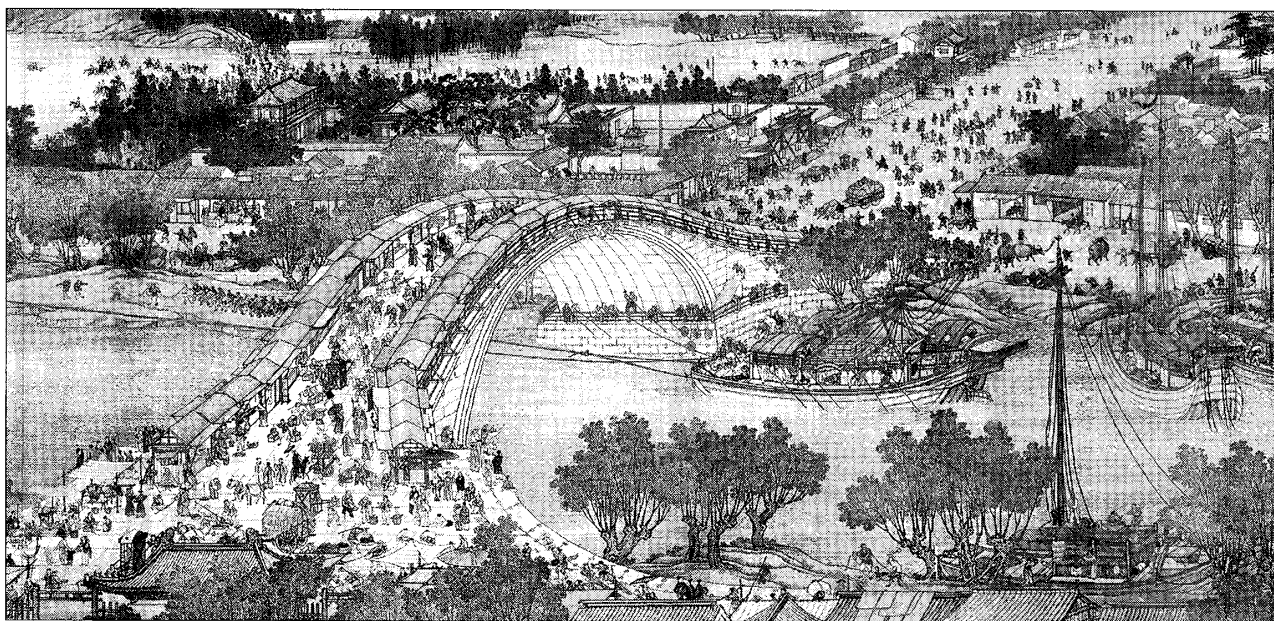


福州図（万曆24〔1596〕年、内閣文庫蔵）

上品な都市の、王族の住む通りか目抜き通りかには、必ず豪華な凱旋門〔牌楼〕が数多くある。しかしカンタンのそれは数も多くないし、豪華さも他に比べればずっと見劣りがする。上品な都市の凱旋門は豪勢なうえに、派手ですばらしいできばえであることから、囚われて内陸部へ連行されていたポルトガル人たちはその値打ちをそれぞれ三〇〇〇クルザードとふんだものであった。これらはいそう厚く長い八本の支柱の上に据えられ、通りを三つのアーチが跨ぐ恰好で建っている。中央のアーチは両側のそれらよりも大きく、それぞれのたもとには二個ずつの礎石が配してある。支柱のてっぺんには、非常に風変わりな派手な構築物が乗っている。その上部はいそう華やかな磁器製の瓦で葺いてあり、これによって醸し出される気品と美しさは大変なものである。これらのアーチは、そのたもとで大勢の人々が雨や太陽を凌ぐことができるような幅と恰好に造ってある。したがってアーチのたもとでは、たくさんの果物や安ピカ物、それに多様な雑貨が売られる。これらのアーチを木材の上に建てるという地方もいくつかあるにはあるが、大方の地方では、それはことごとくきわめて良質の石材製であり、その石材にたいそうみごとな彫琢が施してある。

諸都市の外観が堂々と、気高く、しかも華麗になるのはこの凱旋門のおかげにほかならない。新任の官員が任地へやってきたとき、またチナ人が自分たちに共通の祝日を祝うとき、彼らは絹織物で凱旋門に化粧を施す。そして彼らの祝祭⁽¹⁾がもっとも賑わう夜になると、これにあまたの提灯をぶら下げる。華やかに彩色された絹織物とあいまってこれらの提灯が凱旋門をひととき華麗に、かつ堂々たるものたらしめ、燭台の明るさに照り映えて提灯もたいそう美しい外観を呈する。夜、これらの凱旋門が美しさを増し、かつすばらしい外観を呈するのは、ひとえにこの提灯や絹織物のおかげである。これらの凱旋門は主要な為政者たちが建立するものであるが、そのねらいは、自分たちへの記憶を永遠に残すためであり、その手段として彼らはここに自分たちの事績を印した銘板を取りつける。

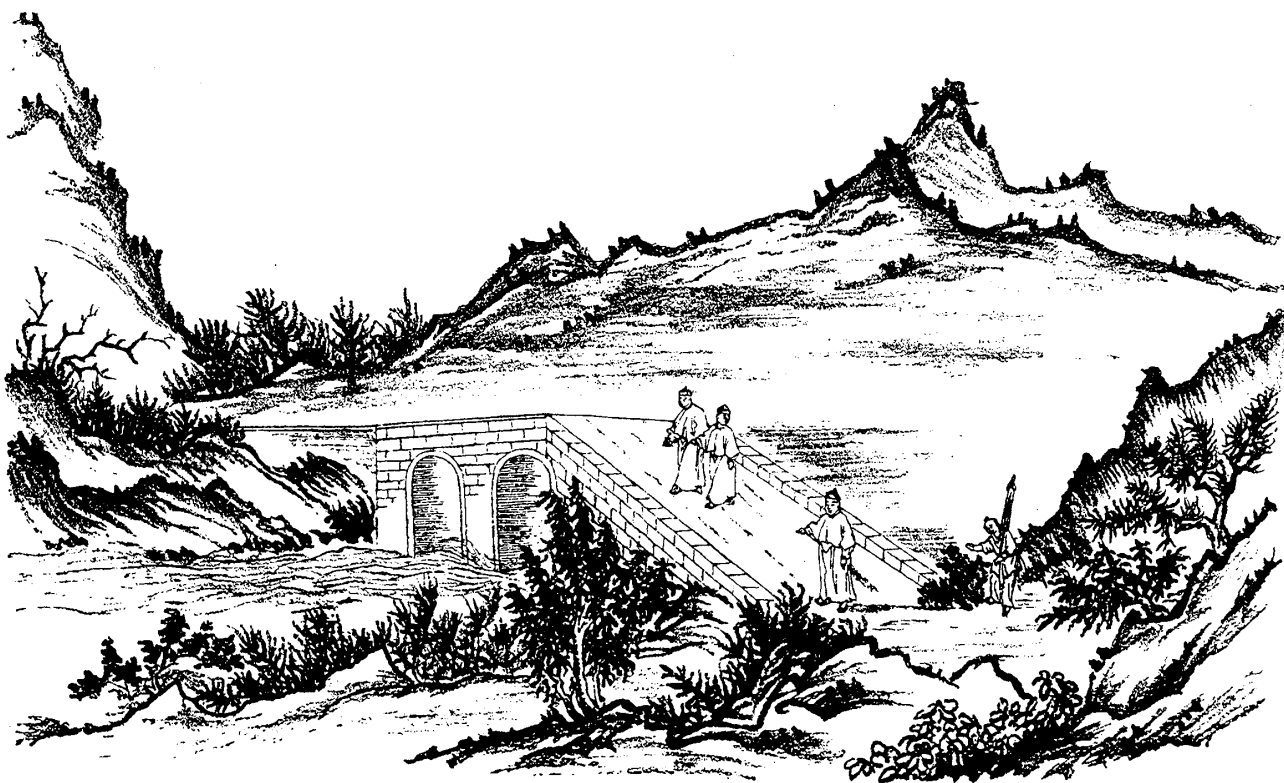
記憶を後世に遺すというこうした発想は、この地を統治し支配するに用いられる政治の要諦^{ようてい}ともろもろの法律、高い卓での食事、そしてこれらに類似し、アジアの諸国民には全然見られない諸慣習と同様、どうやらローマ人からの模倣行為なのではあるまいか⁽²⁾。したがって以下のように考えられるのである。すなわち流刑に処されタナス〔ドン〕河地方のシタス〔スキタイ人〕のあいだに閉じこめら



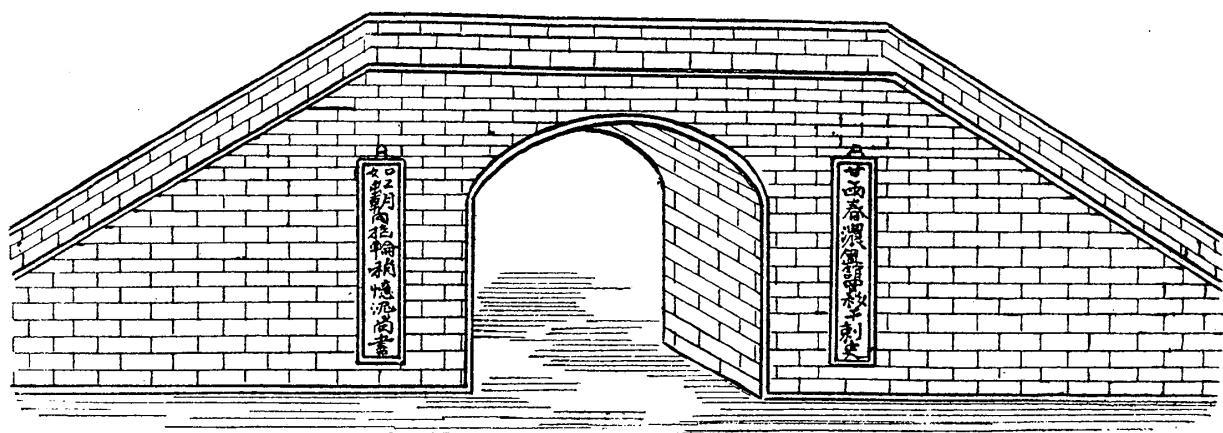
都市のにぎわい（故宮博物院〔台北〕蔵『院本清明上河図』より）

れたオヴィディオ〔オヴィディウス〕^③がシタスをこうした洗練された生活と慣習の中に導いたのではないかと。なぜなら彼は『悲傷の賦』(*De Tristibus*)においてこう述べているからだ。「私は蛮族シタスのもとへ流されてきたが、まんざら無為に過ごしたわけではなかった。私は彼らにローマ風の文化の中で生活するようにさせたからだ」と。

ほとんどすべての都市は河沿いに建設されている。あまり深くなく流れの激しくない河のある都市には、それを渡るための石橋がある。この石橋はたいそう気品があり、みごとな彫琢が施してある。その橋脚は充分な基礎工事が施され、かつ相当な高さに組みあげて初めてアーチ型に造ってゆかれる。橋脚はきわめて大きく非常に厚い平石によって、上のほうで次々に連結されている。この平石をボル



橋 (J. H. Gray, *China* より)



橋 (J. H. Gray, *China* より)



パゴダ付きの橋 (J. H. Gray, China より)

トガル人たちが計測したところ、その長さ、あるものは一パツソ、あるものは一二パツソと判明した。こうした橋の幅はたいへん広い。河の幅もまた非常に広いので、橋の長さは相当なものだ。ポルトガル人たちがいる橋の片側で橋脚の数を数えたところ、四九個と判明した。橋そのものはアーチ型ではなくすべて水平に設計してあるので、端から端まで視界におさめることができる。両側の側柱および欄干にはたいそう華麗な浮き彫りが施してある。

こうした橋は諸都市の主要な市場であり、ありとあらゆる食糧品が売られる。ところでチナについて驚嘆すべきことがある。それはチナ全土の無住の地に数多くの橋があることだ。しかも都市の近傍にある橋に比べて安く上げてあったり造作がおろそかであったりというわけではない。それどころか、より費用をかけ入念に造作されたものばかりである。一部の都市には、ことに大增水の時期、きわめて深くかつ流れの激しくなる河があり、石橋はこれに堪えることができない。その場合、彼らは小舟の上に木の橋を架設する。小舟は二列に並べられ、太い鉄索で繋がれ、いずれの側にもすばらしい浮き彫りの施されたとても華やかな木製の手摺りがついている。ポルトガル人たちはこうした橋〔舟橋〕のひとつに用いられている小舟の数を数えたところ、一一二艘と判明した。こうした橋もまた都市の主要な市場となる。あらゆるものが売られるが、特に食べ物である。食糧品を満載したおびただしい数の小舟がやってきて、橋の両側で持参したものを売りにかかる。

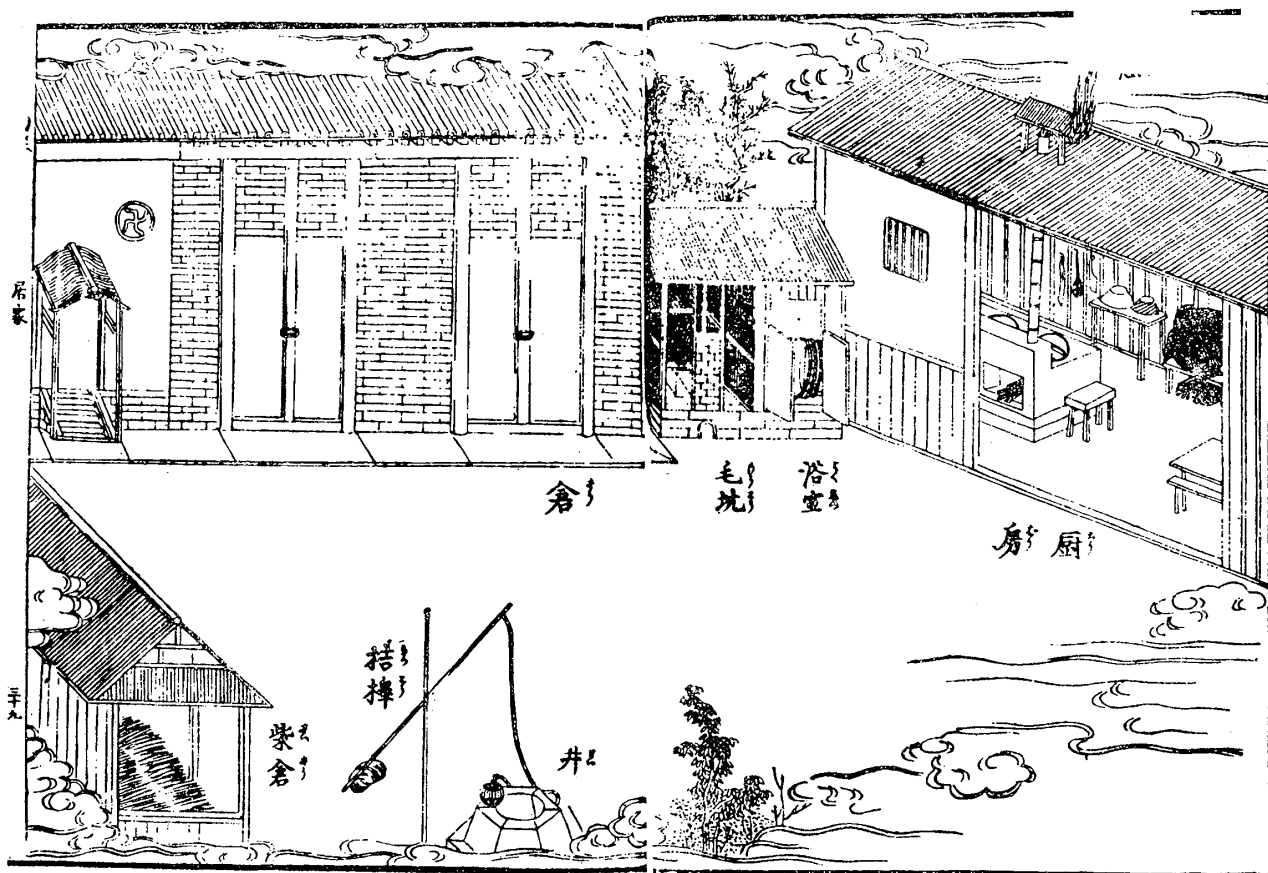
冬季になって河の流れがひととき激しくなると、この橋を解体し、一列の小舟を一方の岸に、いま一列の小舟をもう一方の岸にそれぞれ鎖^{ととの}でもって繋ぐ。こうして今度は渡し舟として役立てる。為政者にはこうした小舟を市民の利用のために調えておく義務があり、その経費は国王の公用資産から支弁される。チナには数多くの地方にこうした橋がたくさんある。

一部の都市においては河水がほとんどすべての通りに入りこんでいる。そうした通りの両側には切石で造られた船着場があり、人々の日常の用に供されている。あらゆる通りには、こちらからあちらへ渡るための、すばらしい、りっぱなできばえの橋が必ずある。市街のただ中を小舟がきわめて頻々

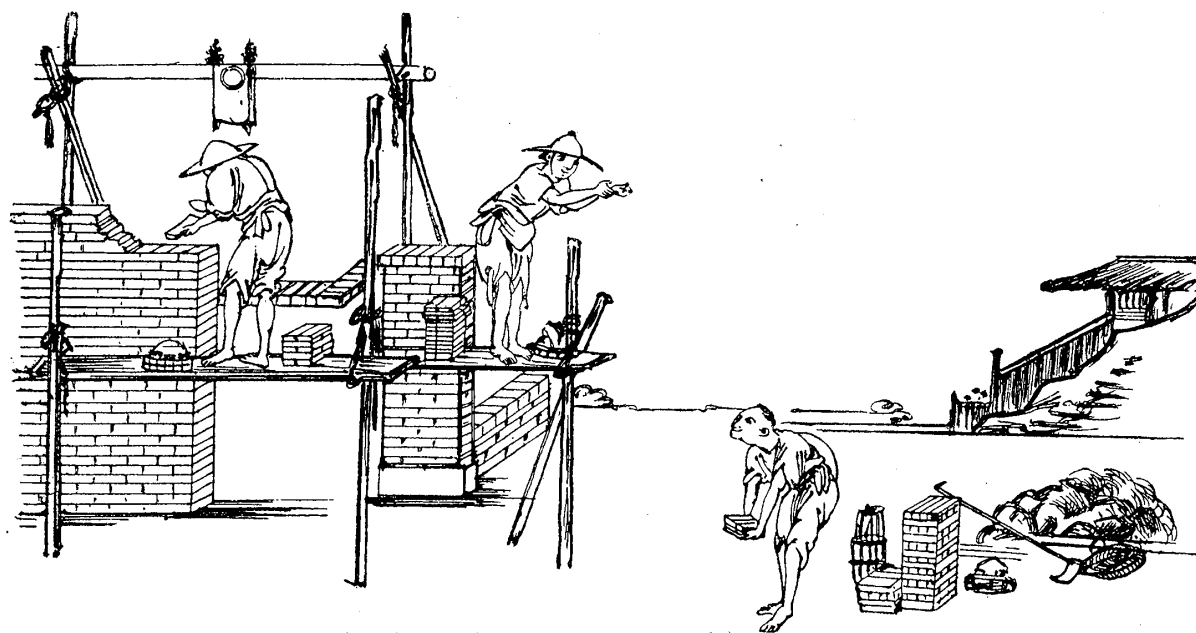
と行き交っている。河水が都市の内部に入ろうとするところでは、城壁にたいそうりっぱな水門が造っており、水門には夜間閉鎖可能な鉄格子の堅牢な扉がついている。

内陸の道路の大半は石でりっぱに舗装され、石のないところでは煉瓦で舗装してある。この煉瓦は第六章で上述したとおりのすばらしいものである。いかなる山間地でも丘陵地でも、そこに道がある限り、その道は鶴嘴^{つるはし}でもって切り拓かれみごとなできばえであり、必要な箇所では石畳の舗装が施してある。これはチナのすばらしい土木工事のひとつであり、全土にあまねく行なわれている。ブラマ〔ビルマ〕人およびラオス人の住む方向の幾多の連山はたいそうよくできた階段状に切り拓いてあり、峰の頂は巧みに削られてひとつの窪みとなっている。その窪みの中にはたいそう高い塔があるが、その上部と峰の頂とは同じ高さである。門扉の入口あたりで、ある塔の壁が計測されたが、その厚さは六ブラサ半⁽⁴⁾であった。こうした建築物はこの方面にたくさんあるが、他の諸地方にもこの手の建築物はあるに相違ない。

城壁に囲まれていない村には富裕な農夫たちの家がある。木々の茂みを隔てて彼らの家を遠望すると、なにやら、ポルトガルへ戻って上品で高尚な田舎の別荘を眺めているかのような錯覚にとらわれる。彼らの家は爽やかな木々の茂みにあり、眼を凝らしても、彼ら以外の家は視界に入らない。いたるところに富裕な農夫の家は数多くあるのだが、一見したところ、そうした家の廻りに人が住んでいる様子はない。しかし近づいてみると、かなり大きな規模の、多くの住民をかかえる村落の存在に気づく。通りは一般的に狭いものの、整然たる区画整理が行なわれている。村落の家はたいそう高く、どれもこれも三層か四層造りである。屋根は見えない。それは念入りに造作された壁が上のほうまでせ

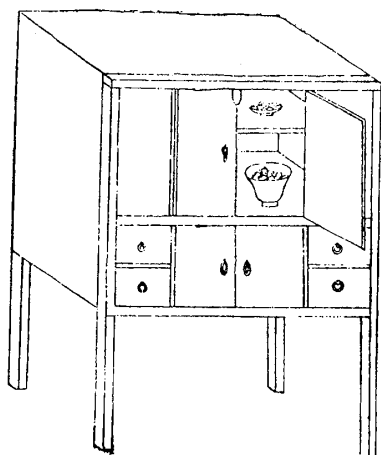


清代の民家（『清俗紀聞』より）

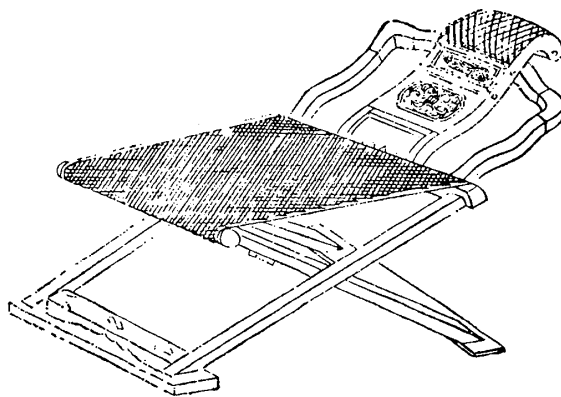
民家を建てる (J. H. Gray, *China* より)

り上がっているからだ。雨水は樋を通じて外へ捨てる。家々は堅牢であり、堂々として華やかな切石造りの玄関がある。入口にはしっかりとした高い壁に囲まれる応接間がある。右のようなやり方で、またこうした応接間によって彼らは家の守りを堅くするのであるが、それというのも、ときおり一群の盗賊どもが集結するという事態が生ずるからだ。彼らは城壁に囲まれていない村々を狙ってそれを略奪してまわるのだ。盗賊どもから身を守り、万一に際しては身内の者を内部に収容してみずからの安全を保つべく、彼らは右のような家造りを行なうのである。人々の裕福さがあってこそこういうことが可能なのであろう。

こうした家のうちでも第一等のところへ入ってみる。それはそれは堂々としている。中にはいくつかの堂々たる戸棚がある。どれもたいへんすばらしいできればよく彫琢が施してあるが、どちらかといえば装飾性よりも堅牢さと耐久性を身上にした作品である。またいくつかの背もたれ椅子もある。すべて木製で、たいそう頑丈でありできれば申し分ない。こういう調子であるから、彼らの家財は長持ちするし、まったくすばらしいの一語に尽きる。まさに子や孫の代にまで残るものといってよか



厨櫃 (茶だんす)



馬踏子一名胡床 (左右とも『清俗紀聞』より)

ろう。

- (1) クルスのいう「彼らの祝祭」とは燈節のことだろうと容易に推定される。外国人観察者によって feast of lanterns と呼ばれたこの祝祭については、第一四章注1 参照。
- (2) これは、以下のオヴィディウス云々と同様、クルスの荒唐無稽な独断である。事物の直接的な描写から離れて、物事を無理に解釈しようとしたばかりに陥った誤謬の一例といつてよい。リッチは、高い食卓で食事をし、椅子に座り、寝台で寝ることを、シナとヨーロッパの奇妙な共通点と見ているが、これも、単なる偶然の一致と考えているようである（リッチ『中国キリスト教布教史 一』二八頁）。
- (3) 原綴り Ovidio. プブリウス・オヴィディウス・ナソ Publius Ovidius Naso（紀元前四三～紀元後一七年）。ローマの詩人。ヴェルギリウス、ホラチウスとともにアウグストゥス帝時代の人。晩年には、その理由や真相などいっさい不明ではあるが、黒海の西岸に臨む流刑地トミス、現在のコンスタンツァに追放された。
- (4) 原綴り braça. 古い長さの単位で二・二メートルに相当。

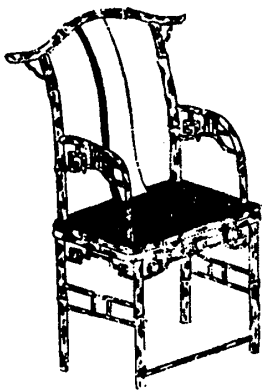
第一四章 チナ人の行なう数種の祝宴について。また彼らの音楽と葬儀とについて

自分たちの誕生日に盛大な祝宴を行なうのはチナ人の習わしである。昔の異教徒のこうした慣習が今なお彼らのあいだに存続しているのである。この祝宴には、誕生日を迎えた人の親戚や友人が一堂に会する習わしであるが、こういう人たちが誕生日を迎えた人へ贈り物をすることによって、祝宴の費用が軽くなるよう協力してやる。自分たちの誕生日を祝うとき、同じ方法で返礼をしてもらうためである。実に多大な費用を捻^{ひね}り出せるのも、おごそかな雰囲気^{いけにえ}を演出できるのも、すべてこういう助けあいのおかげにほかならない。祝宴は夜を徹して行なわれる。すべての異教徒がデウスを認識せぬまま暗闇を徘徊しているのと同様、インディアのあらゆる地方、ことにチナにおいては祝宴は夜に行なうのである。祝宴にはきわめておびただしい量の食物と酒とがつきものであり、彼らは食べること、飲むこと、音楽、いろいろな楽器をさまざまに奏でることに丸一夜を費やす。

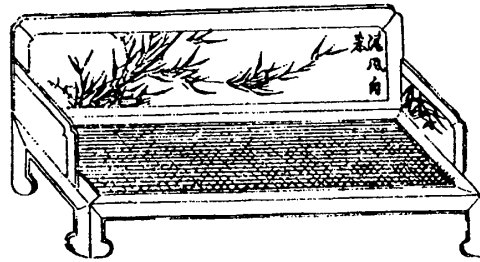
彼らの僧侶たちは華やかな装束に身を包み、自分たちの神々へ生贄^{いけにえ}を捧げる。僧侶たちはさまざまな様式の衣裳を纏い、抑揚の効いた声でみずからの祈禱歌を詠ずる。こうした生贄の儀式や奏楽、それと詠唱のあいだは食物がいっぱいに載った卓があり、各自もっともおいしいと思うものに手を伸ばす。僧侶たちは一般の人々と同じように詠唱しながら、通りに面した玄関先に、みごとな紙製の凱旋門〔牌楼〕を作る。さらに段々が作られて、そこにはもろもろの肖像や彫像や絵画のほか、枝のへし折られた、入念に磨かれて彩色された高い木々が数本にぎやかに飾ってある。その木々にはたくさんの燭台が配されて火がともっている。いたるところに爽やかで華やかな提灯が掛けてあって、しかもそのすべてに灯がともっている。

ことに一年の朔日に催される全民衆に共通の祝祭においては、通りという通り、門扉という門扉がいとも華やかに飾りたてられる。なかんずく凱旋門〔牌楼〕を飾りつけることに丹精を凝らしかつ努力する。すなわち、凱旋門にたくさんのダマスコ織りや絹の布地で装飾を施すのである。いろいろな楽器による奏楽や歌唱が盛んに行なわれ、その周囲には、たっぷりの食べ物と多彩な料理、これまたたっぷりの酒がある⁽¹⁾。

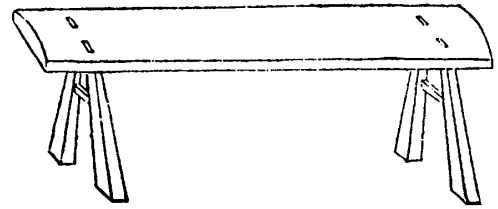
彼らは非常にしばしば劇の上演も行なう。この劇を彼らはたいそう上手に、しかもごく自然な感じ



竹製の椅子



長椅子



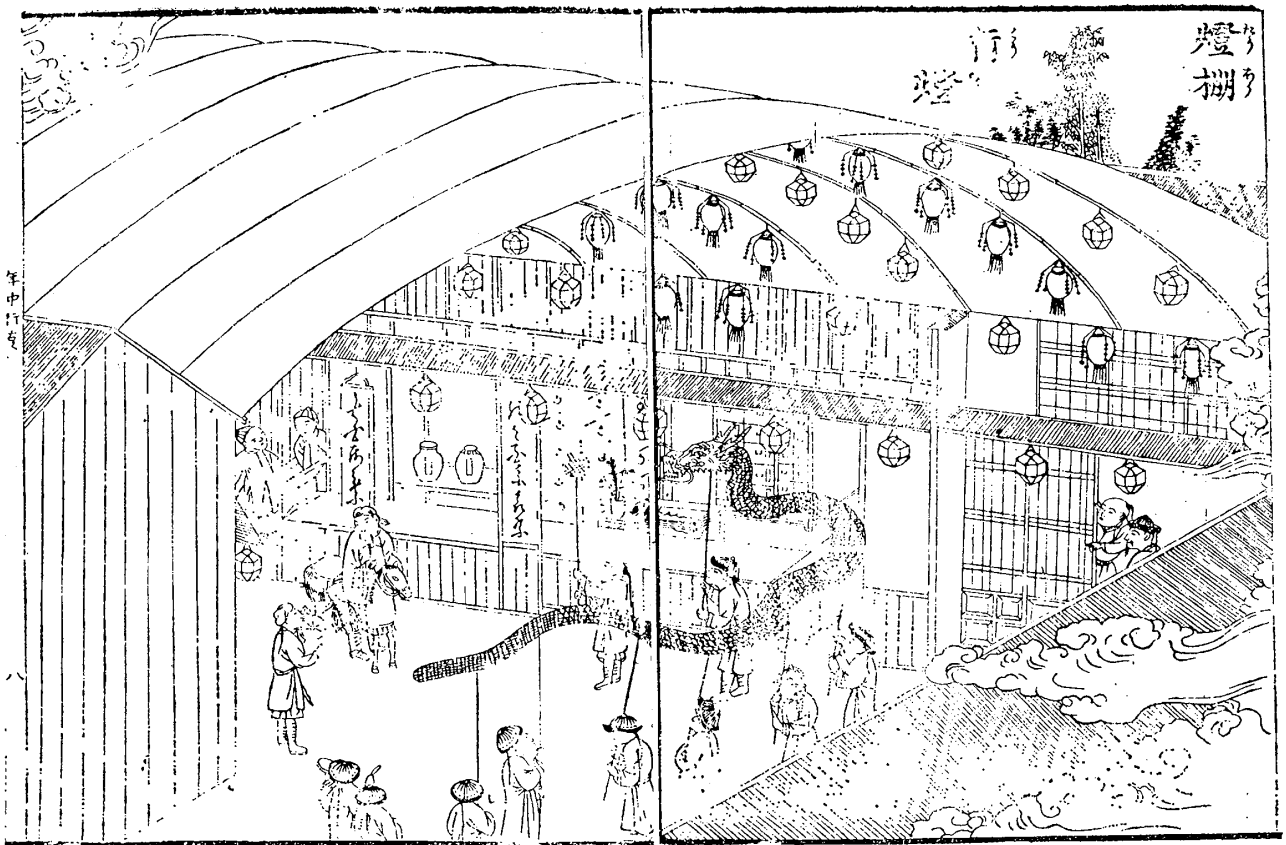
長板の腰掛け

(いずれも『清俗紀聞』より)

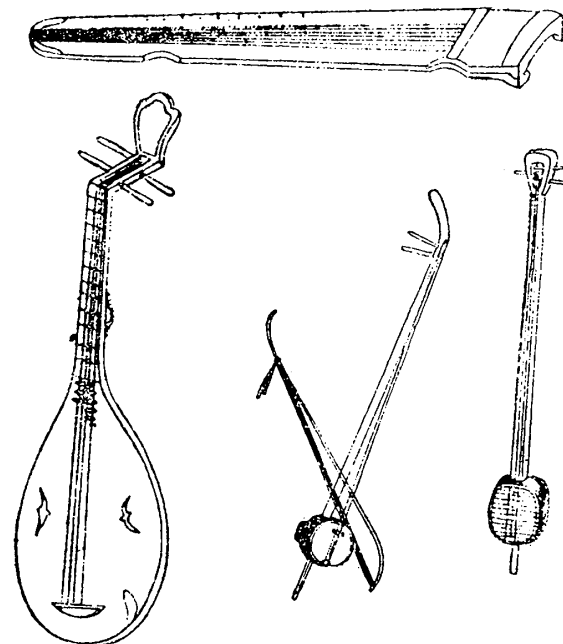
に演ずる。演技者たちはみずからの扮する役柄に必要な装束にみごとに身を包み、きちんと着こなす。女形を演ずる者はその役柄が要求する衣裳を着るのみならず、紅やおしろいを顔中に塗りたくる。登場人物の科白が理解できないとうんざりしてしまうが、わかればそれに耳を傾けて大いに愉しめる。彼らは次から次へと行なわれる演劇に一晚中、ときには二晩も三晩も連続して没頭することがある。こうした演劇が行なわれているあいだは、食べ物と飲み物を満載した卓が置かれていなければならない。彼らの劇には二点ばかり非常な不体裁がある。一点は、もしひとりが二役を演じて衣裳を換えねばならぬ場合、当人がそれを全観客の前でやることである。もう一点は、演技者のみならず独白をする者までが、ほとんど歌うような大声でしゃべることである。彼らはポルトガル人からおひねりをもらうため、ときおりナオ船へ劇を演じにゆく。

彼らが奏でるに用いる楽器は、調律のための糸巻きがついた、あまり形は良くないものの、我らと同様なヴィオラ〔琵琶〕である。我らのより小さく、かつギターラ〔ギター〕の形をした一種のヴィオラもある。これまた我らのよりは小さく、かつヴィオラ・ダルコの形をした別種のヴィオラもある。彼らはまたドサイーナ〔不詳〕やラベカ〔三絃胡弓か〕、さらに一種のチャラメラ〔喇叭〕も用いるが、これは我らの奏でるチャラメラとほぼ同じである。彼らは真鍮製の糸の絃がたくさんついた一種のクラヴォを奏でる。これの演奏には爪を使うのだが、彼らはそのために爪を伸ばすのである。以上の楽器はよく響きわたって、まことにすばらしいハーモニーをかもし出す。彼らはしばしば四重唱に和して多種の楽器を一緒に演奏するが、それはいとも心地よい協和音を生む。

ある月光の夜、私は幾人かのポルトガル人と一緒に、わが宿舎の玄関先の河に面した長椅子に腰を下ろしていた。そこへ、いろいろな楽器を奏でながらひとときを過ごす若干名の青年が一艘の小舟で通りかかった。私たちは彼らの奏でる音楽を聴いて心愉しくなり、どうぞ私たちのいるところへおいでください、あなた方をお招きしたいのです、と声をかけさせた。彼らは慇懃な青年たちらしく、小舟を私たちのそばに寄せ、楽器の調音と調律を始めた。調音を行なうときに不協和音を出さぬ配慮をしているのが、見ていて嬉しかった。演奏を開始しても皆が一緒に始めたわけではなかった。ある者はしばらく待ち、他の者と一緒に演奏に入るのである。彼らは曲の過程にたくさんの音域を設け、ある者が休止しているあいだ、他のある者は演奏するという技を見せた。しかし大体は全員揃っての四重奏に興じていた。それらは、テノールを演ずる大きなヴィオラ二台、コントラバイシャ〔コントラバス。そこから転じて低音域を担当する楽器を指すか〕を奏する大きなヴィオラ一台。そして他のすべてに



元宵節の灯籠飾り（『清俗紀聞』より）



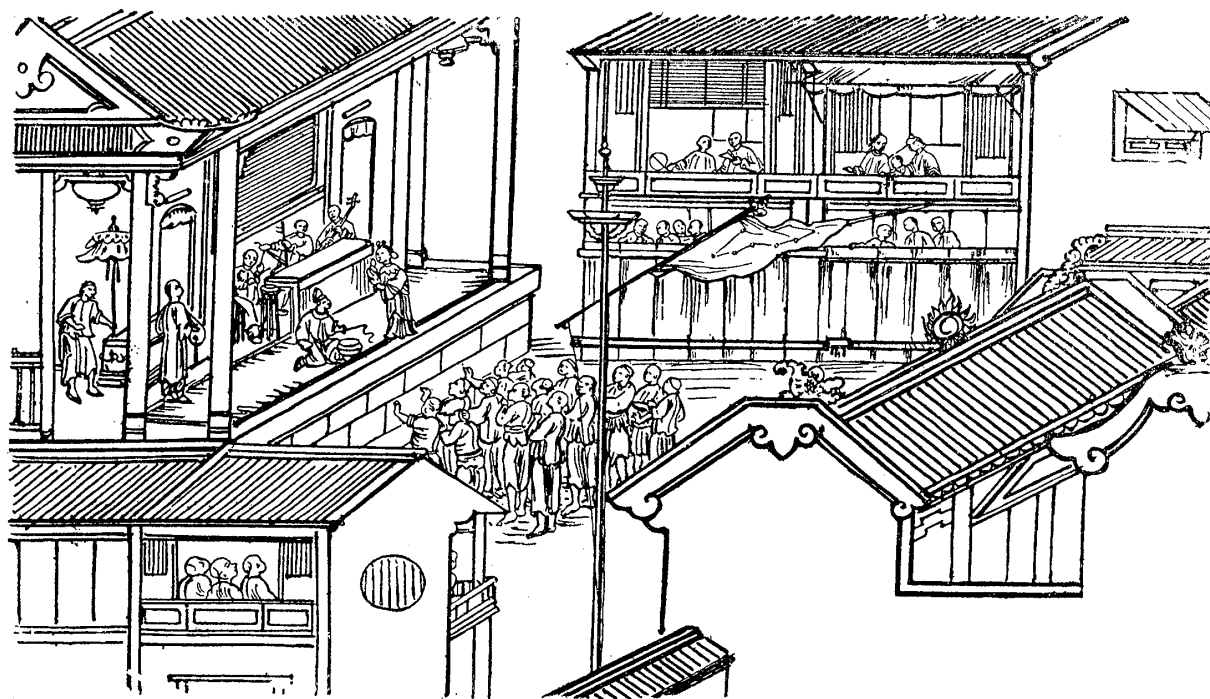
中国の弦楽器（『清俗紀聞』より）

琴（上）琵琶（左）胡琴（中）三絃子（右）

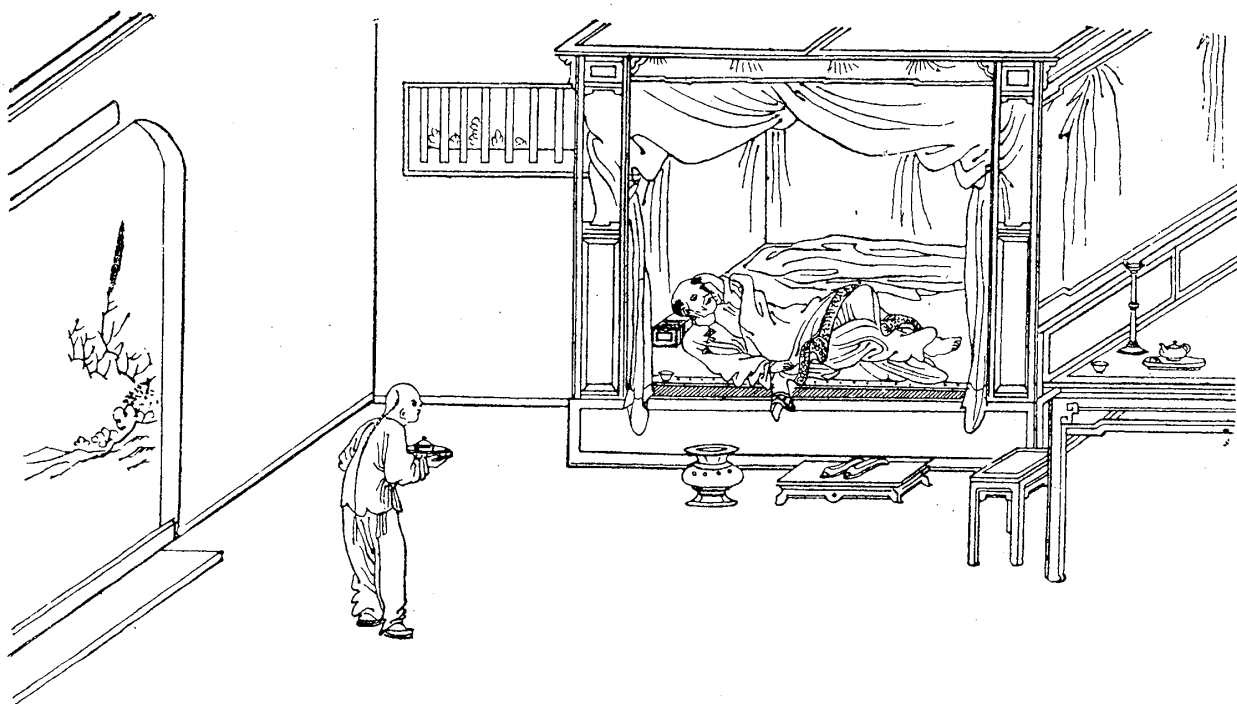
随伴してゆくクラヴィオー一台であり、ある時はラベカー一台、またある時はティブレ〔ソプラノ。そこから転じて高音域を担当する楽器を指すか〕を奏するドサイーナ一台であった。彼らはひとつのすばらしい技術を駆使した。すなわち、私たちがもっと聴きたいと切望するようにふたつ以上の同一旋律は決して奏でないのである。私たちは、歌手の妙なる歌声とともに明日もう一度このあたりへ来てくれませんか、と懇願した。彼らはそうしようと約束したにもかかわらず、来てくれなかった。しかし別のある日の早暁、暁の曲を披露しようとして前回と同じ楽器を抱え、私たちのもとへやってきた。私たちを完全にかっかりさせてはいけないという配慮であったろう。

彼らは一般的に非常に才気に富み手先が器用である。あらゆる分野において大きな独創性を発揮しているが、わけても指物細工と素描画の分野においてそれが顕著である。チナから我らのもとへもたらされる織物に見ることができるように、彼らは特に木々の葉や鳥を描くことにかけては第一級の絵師である。彼らは万事において巧妙かつ利発である。なぜなら彼らには一種の偉大な活撥さと、天性の工夫の才があるからだ。というわけで、彼らは戦いにおいては勇敢に攻撃をかけはするものの⁽²⁾、武力を活用するというよりは策略と多勢に訴えるところが大きい。彼らは鎖帷子や兜、前述したようなその他の武器を用いる。しかし全土において、いかなる種類の武器を携行することも絶対に許されず、小刀さえも例外ではない。したがって人と人が喧嘩するときは、拳骨で殴りあうか毛髪を引っ張りあうかするのである。ただし、兵士と軍司令官の下僚だけは横に寝かせた剣帯に刀剣を差している。

家族、縁者、子供を持つ人が亡くなるとき、彼が息をひきとると、人々はその遺体を洗淨し、彼が大切にしていた衣裳を着せ、靴を履かせ^{ひきまぎ}せる。そして頭には彼の縁なし帽をかぶらせ、椅子に腰かけさせる。そこへ故人の妻が来て、彼の前に跪き、おびた^{ひきまぎ}だしい涙を流して悲嘆に暮れながら、彼に告別する。妻の後は子供たちが順序に従って同じことを行なう。子供たちの後は親族一同、家庭内のその他の人々、さらに友人たちが同じことを行なう。以上の儀式が済むと、樟脳の木で故人のために作っ



清代の野外コンサート (J. H. Gray, *China* より)

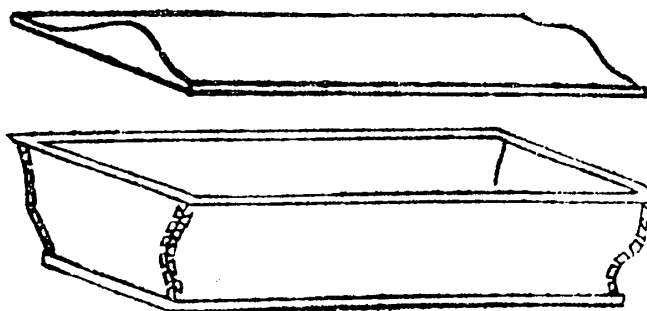


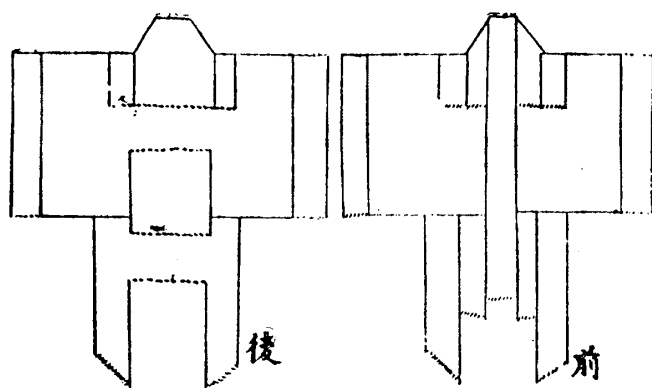
瀕死の人を別室へ移す (J. H. Gray, *China* より)



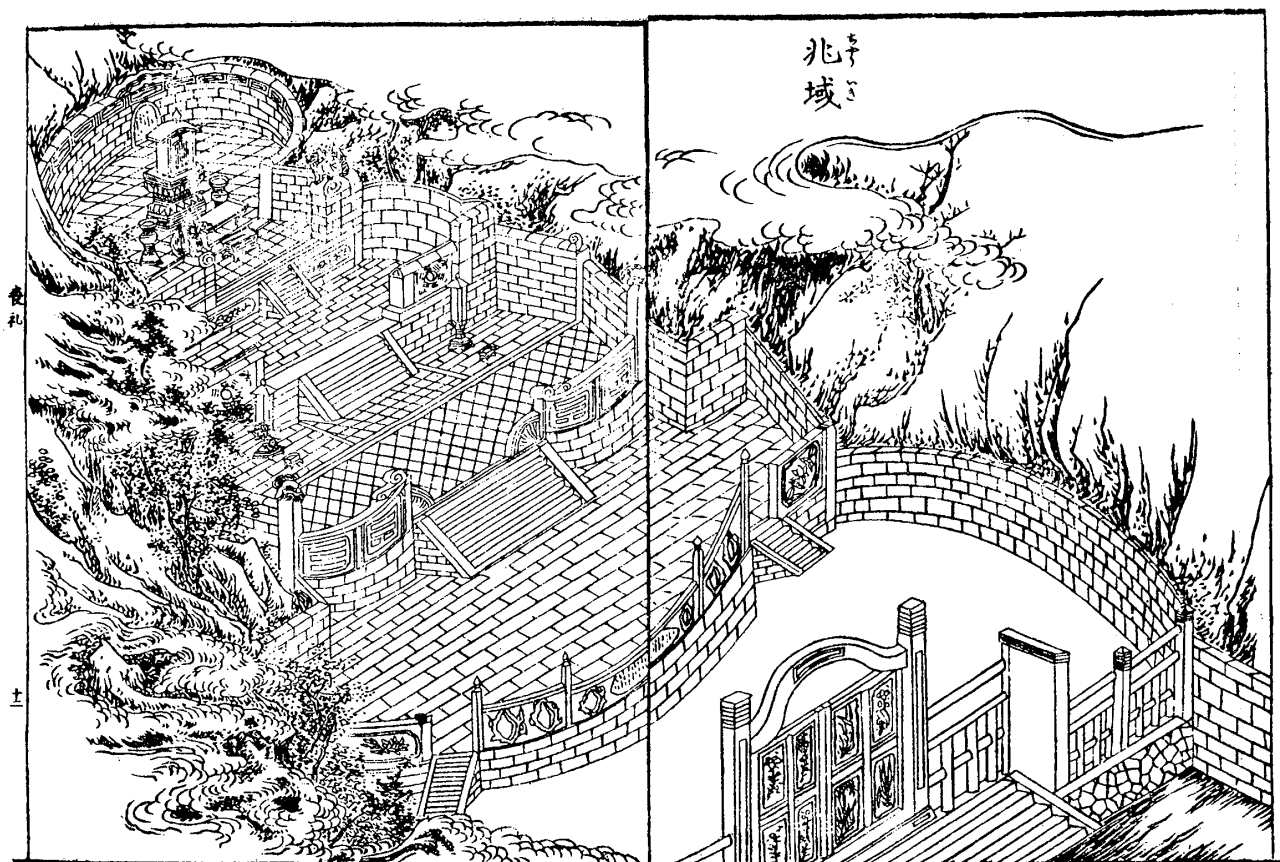
葬列 (『清俗紀聞』より)

蓋をとった棺
(『清俗紀聞』より)





喪服（斬衰）（『清俗紀聞』より）



墓所（『清俗紀聞』より）

ておいた棺に遺体を収める。この棺には死体を防腐する作用があり、芳香を放ち、悪臭が漏れぬよう固く密閉されて釘を打ちつけてある。棺は二台の小さい台の上に置き、上から床へ達する一枚の布地を掛けて棺の上を覆う。布地には故人が生き写しに描いてある。棺の前には裁ちっ放しの白い布で小さな家をこしらえ、その玄関が遺体の正面にくるようにする。玄関には蠟燭をつけた燭台の載った机が置かれ、さらにこの机にはパンやその地で採れるすべての果物を置く。遺体はそこに八日間もしくは一五日間安置して、その間、彼らの神々の僧侶たちが生贄（いけにえ）を捧げるため、またその異教的捏造物へ祈るために、夜になるとひっきりなしにやってくる。彼らはそこへ男女の絵図をたくさん持参し、く

どくどしい儀式とともにこれを焼く。最後に男女の描かれた紙を紐^{ひも}にぶらさげ、激しく祈りながら、また紐をつかんでこれらの絵を揺さぶりながら、大声と叫喚のうちに、我らはこの死者を天へ送り届けるのだと言う⁽³⁾。こうした儀式が行なわれるあいだは昼も夜も、食べ物と飲み物を満載した机が置いてある。儀式が済むと、棺を持ち去り、死者たちの眠る野原にこれを埋める。そして棺は時とともに朽ち果てる⁽⁴⁾。

彼らが用いる喪服は、私がこれまで見てきたうちでもっともざらざらしたものだ。すなわち、粗い毛織物で作った普段着同然の寛衣をじかに肌に着て⁽⁵⁾、太い縄を胴に巻き、頭には寛衣と同一生地縁なし帽をかぶるのである。これは、両眼の上にまで垂れるひさしがあるのを別にとすると、この地でふつうに用いられる縁なし帽と同じ作りである。親族関係において故人に近ければ近いほど纏う喪服はいっそうざらざらなものとなる。その他の者は手を加えてはいないが、さほど粗くない布地を身につける⁽⁶⁾。

父母に対する服喪期間は三年である。ロウティアであれば訃報に接するやただちに従っている職を辞し、自宅へ戻って三年の喪に服する⁽⁷⁾。それが済むと政庁へ復歸して職を求める。

チナ人が印刷術を利用するようになって九〇〇年以上が経過し、彼らは刊本のみならず種々の画像すら製作すると、チナではいわれる。

- (1) これは元宵節を描いたものであろう。正月一五日を元宵という。この日はさんで一三日から一八日までの六日間（あるいは一六日までの四日間）、家々は飾り灯籠を燃やし、賑やかに祝う。リッチの次のような記述と対照する。

「各宗派に共通する最大の祝日は正月である。そして陰暦一月一五日には提燈の祭が行なわれる。この日にはどの家にも、いろいろな細工を施した紙やガラスや紗の美しい提燈が点される。この数日間、市場ではたくさんの提燈が売られ、どこの家の広間にもたくさんの提燈が並べられる。そしてこの二、三日の間、夜になると、人びとは通りに出て、こうした提燈を眺めて楽しむ。広場や道路や家々の至るところで、光を放ったり回転したりするさまざまな花火をあげるのもこの時期だ」（『中国キリスト教布教史 一』九七頁）。

- (2) 近世以後、中国を訪れた西洋人観察者たちは、ガレオテ・ペレイラを含め、中国人の軍事的劣弱を盛んに指摘しており、中国人の武勇と兵器の優秀さを絶讃するメンドーサや、控えめながらその「勇敢」さに言及するクルスらは明らかに少数派に属するといつてよい。

まずトメ・ピレスは、一六世紀初期、東アジアのポルトガル人のあいだに広まっていた中国人の「脆弱」さに関する風聞を次のように伝えている。

「それ〔シナ——引用者注〕を征服するためには、われわれの属領であるマラカの総督は人々がいうほどの力を必要としないに違いない。なぜなら、かれらは脆弱な国民であり、征服しやすいからである。しかも同地に何度も渡航したことのある重立った船長たちは、マラカを占領したインディア総督ならば、十隻の船でシナの沿岸地帯のすべてをも征服することができるであろうと断言している」（『東方諸国記』二四〇～二四一頁）

一五八四年六月二五日付で、マカオからイスパニア・ポルトガル国王フェリペ二世へ送られたイエズス会員フランシスコ・カブラルの書翰には、シナの武力征服の必要性が熱心に説かれている。カブラルはその事業を容易にするシナ王国側の事情をいくつか列挙しており、その中に次のような一節がある。

「第二に、彼らは非武装の国民である。なぜなら、何人も剣を持つことが出来ないからで、それは、現在国境の守りにについている兵隊たちを除き、剣を帯びることが禁じられているからである。そして国王だけが倉庫に武器を所有していて、どこかで戦争が勃発すると兵隊に貸与され、戦いが終わるとまたそれを返却させる。このため国民はあまりにも軍事訓練に乏しく、また臆病で、先年私がこの町にいた時のことであるが、僅か一三人の日本

人が乗った小舟が一隻渡来し、ここから四レーグア離れた所に乗り上げるや、二～三〇〇〇人以上のシナ人に包囲され、日本人たちは洞窟にとじ込められたが、彼らはその堅い壁に出口を作り、そこから脱出するや、直ちに多数のシナ人を殺害してしまった。シナ人は彼らを一昼夜にわたり包囲しながら中に入る勇気がなく、結局日本人の人数が増えて、彼らは一か八かで突撃を敢行し、そしてかの日本人たちはその近くの海岸に行つて、シナ人たちの抵抗にもかかわらず、彼らから舟を奪ってそれに乗って逃げてしまい、シナ人たちは彼らを一人も殺すことが出来なかった」(『イエズス会と日本 一』六～七頁)

- (3) 中国人の厚葬ぶりが印象的だったせいであろう、葬礼や喪服や服喪期間についてはヨーロッパ人観察者に詳しい記述が豊富である。ここまでの記述はリッチの次のような記述と対照されてよい。

「身分の高い人が死ぬと、その息子あるいはいちばんの近親者がほかの親族に手紙を送って、悲しみの溢れる言葉で父の死を知らせ、厳粛に嘆き悲しみ始める日取りを指定する。それは三日ないし四日以内である。この間に柩をつくらせ、死者を納め、喪室を白い布ないし白い筵で覆い、中央に柩を置く。身分のある人の場合には、四、五日後の予定の日がくると、終日喪服を着た親族や友人たち全員が訪れ、死者に香と二本の蠟燭を捧げる。蠟燭に火を点すと、人びとはまず死者の柩や等身大の肖像画の前に置かれた香炉に香を入れ、前にも述べたお辞儀と跪拝を四回くり返す。人びとがこうした儀式を行なう間、息子あるいは息子たちは、喪服に身を包んで片側に跪き、深い悲しみに沈んで泣きつづける。棺の背後の幕の陰では、やはり喪服をまとったその家の女たちが大声で嘆いたり泣いたりしている。こうした場面で数葉の紙〔紙銭〕や白い絹布を燃やす慣わしがあるが、死んだ人間にそういう品々を捧げて、死後に、愛のしるしとしてそれを着てもらうためだ」(『中国キリスト教布教史 一』九二～九三頁)

- (4) このあたりの記述をリッチの次の記述と対照する。

「墓地は必ず市の外にあるのだが、柩の墓所に移す日には、親族から書状で招かれた親族や友人一同は改めて喪服を着て集まり、柩を送る。当地では、紙でつくった男や女、象や虎やライオンなどさまざまな像をつらねて行列のようなことをして、その像を墓所の前で焼く。また死者の供をして大勢の偶像教の僧たちもやってきて、祈禱をあげ、さまざまな儀式を営み、小さな太鼓や笛やチュッフィロ〔不詳〕や銅鑼を鳴らし、男たちは大きな香炉を肩に担いで進む。柩は非常に重く、絹布でつくった種々の細工に覆われ、四、五〇人の人夫が担ぐ。そのうしろを喪服に身を包んだ息子たちが杖をつきながら徒歩で従い、女たちは姿を見られないように、やはり白い幕の陰に隠れて徒歩で行くか、同じく白布に覆われた轎に乗って行く」(『中国キリスト教布教史 一』九三～九四頁)

- (5) 原文 *trazem pelotes ao uso comum de lana grossa a caram de carne. A caram de* というのは古い熟語で「…にくつついて」「…のすぐ近くに」の意 (Antonio Morais da Silva, *Grande Dicionário da Língua Portuguesa*)。

- (6) 喪服についてはセメードに次のような記述があり、クルスのそれを補強する。

「一同が家に戻ると喪の期間に入り、儀式が始まる。まず第一に、どこでも守られる儀式は、大変重いごつごつした衣服を着ることである。喪服は白色で、これはこの国だけではなく、ハボン〔日本〕、コレア〔朝鮮〕および近隣の国々においても同様である。なぜこの色を使うのか理由が分かっているわけではなく、喜びの色としてむしろこれを使う場合もあるのである。考えられる理由は、チナでは木綿、絹あるいは亜麻布以外の織物は織られなかったということぐらいである。まえのふたつの材料では頑丈なものをつくることができないけれども、最後のものではそれが可能である。この亜麻布が一番ごつごつしたものであるということからしてごくあたりまえのことだが、それを喪服に使うようになり、またその生地が白なので、喪服も白ということになってしまったのであろう。彼らは、喪に際しては、なによりもまずそこになにかわざとらしいもの、あるいはみやびやかなものを入りこませないように心をつかったのである。実際に彼らは非常にごつごつした糸を紡ぎあげるので、それで縫った布はひどいものであり、野蛮人の着るものに等しい」(『中国キリスト教布教史 二』三二一～三二二頁)

さらにリッチにも簡潔ながら喪服についての記述がある。

「彼らが他の国民と異なり、最も心を砕くのは、死者が出ると喪服をまとい、葬儀を営み、立派な柩を買って、財産や家財のある人びとは立派な墓所をつくることである。すなわち、彼らの喪服の色は黒ではなく白である。そして父親や母親の喪に服すときは、とくに最初の数日間と一年目には、非常に厚手の麻服をまとうのだが、とても奇妙なことには、帽子や、靴や太い帯も麻布である」(『中国キリスト教布教史 一』九二頁)

中川忠英『清俗紀聞2』巻之一「葬礼」の項も参照。

(7) 服喪期間についてもセメードに次のような記述がある。

「このチナの服喪は三年間続く。息子たちはこの期間ずっと椅子には坐らず、喪服と同じ布で覆われた台に腰掛ける。卓子で食事することもないし、寝台にも寝ずに(床に布団を敷いて寝)、酒も飲まず、肉も食わない。また(彼らがくり返しやる)水浴もしないし、宴会にも赴かない。外に出るときにも必ず窓を閉じた喪用の轎に乗っているし、(彼らの言うところを信用すれば)自分の妻妾も近づけない。試験があっても、これを受けることができないし、いかなる公職につくこともできない。父母が死亡した時に、実際になにかの公職についていると、ただちにこの職を辞し、家にかえり、喪の期間中以上のような儀礼を務めるのである。喪が明けると、以前についていた職か、他のもっと上級の職に復帰する」(『中国キリスト教布教史 二』四〇一～四〇二頁)

さらにリッチの記述も引用する。

「父母の場合には、それぞれについて三年の間こうして喪に服すきまりになっており、誰もそれを破ることはできない。ほかの親族の場合には、喪服が異なるばかりか、死者との血縁関係の遠近に応じて、一年あるいは三か月というように、短くなる」(『中国キリスト教布教史 一』九三頁)

第二十七章 チナ人の祭祀と崇拜対象について

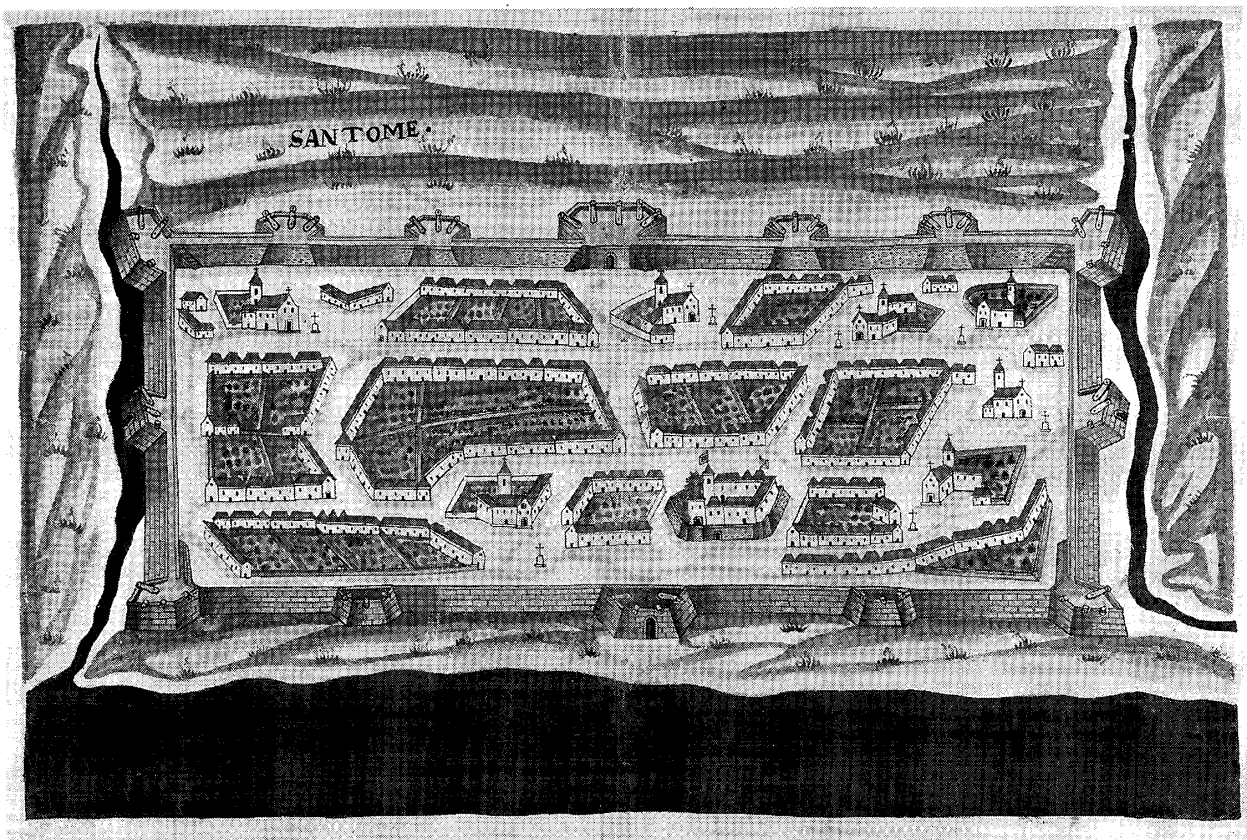
この人々はデウスについてなんら知識を持たず、彼らすべてのあいだにおいてそうした知識の痕跡すら見いだせない。以上から、真実、彼らには自然の事物をじっくりと考察するという習癖がなく、自然哲学系の学問が彼らのあいだには存在しない、ということがわかる。もっとも幾人かのポルトガル人は彼らのあいだにそうした学問が存在すると述べたがっている。が、そのようなポルトガル人にはチナ人のあいだに存在すると彼ら自身が考える学問への誤った思いこみがあるのであって、そうした学問が法則の蓄積によるものであっても、体系的哲学に支えられたものではないということを理解していないのである。幾人かのチナ人は、すでに述べたように、古人のいくつかの著述によって太陽と月の蝕に関する若干の知識を有するとはいえ、さりとてこれについての体系的学問が存在するわけではない。

もし彼らにこの自然哲学系の学問があったのなら、それを通じて彼らは往時の哲学者が得ていたようなデウスの認識に楽々と到達していたことであろう。使徒聖パウロは「ローマ人への書翰」においてこう述べている。「デウスにまつわる不可視的な事柄、神性、御力、永遠性は被造物、可視物に対する考察と認識とによって知られるにいたる」⁽¹⁾と。したがって、チナ人に唯一神に対する認識がないということは、チナ人が自然哲学系の学問を有せず、かつ自然の事物に対する熟考を好まぬということを示す有力な論拠である。もっとも幾人かのポルトガル人はその反対を主張してやまないが。

使徒聖トメ〔聖トマス〕⁽²⁾が殉教を遂げた土地——ここをポルトガル人はサン・トメと呼び、土地の人々はモレアポール〔メリアポール〕と呼ぶ——にいたとき、私はひとりのたいそう身分あるアルメニア人が、かの使徒に対する傾倒のあまりアルメニアからその地を巡礼に訪れて、宣誓のうえ、こう証言していたことを知った——かの使徒の御堂で執事を務めていたポルトガル人たちがこの宣誓へさら

に確実性を与えた——。「アルメニア人の確実かつ真正なる著述にしたためられているところによると、かの使徒はモレアポールで殉教を遂げる前、福音を宣布すべくチナへ赴き⁽³⁾、数日間そこに滞在した後、チナ人のあいだでは成果を得られぬと見、かの地でつくった三人ないし四人の弟子を残して、モレアポールへ帰ったという。このことは御堂の記録にも残っている」と。はたして使徒が残したこれらの弟子がチナの地で成果を収め、彼らによってその地が唯一神の認識へ到達したかどうか、私たちは知らない。が、いっさいのこと、すなわち森羅万象の創造、ならびにその維持と支配は上天に依存すると考えているのを別とすれば、彼らのあいだに聖法の概念は存在せず、キリスト教を連想させるものも唯一神の考え方も存在しない。彼らはそうした森羅万象の造り主が誰であるかをはっきりとは知らないで、その主をほかならぬ天に擬している。こうして彼らはただデウスを暗中模索しているにすぎない。

カンタン〔広州〕市を流れる、非常に幅の広い淡水の河〔珠江〕の真ん中にひとつの小島があり、そこに彼らの師父が住む一種の僧院がある。この僧院の内部にあるすばらしい造りの祭壇を私は見た。それは床よりも高くにしつらえてあって手前には金に塗られた螺旋階段をつけてある。祭壇には、男の子を膝に抱いた、たいそう姿のよい女人像が安置してあり、その手前に灯明がひとつもっていた。それがキリスト教のなんらかのなごりではないかという疑問を持った私は、そこで出逢った数人の俗人と、居あわせた偶像の僧侶の幾人かに、この女人像にどんな意味があるのかを尋ねてみた。しかしそれを語れる者はひとりもいなかったし、このようなものがなぜここにあるのかわからぬと言うばかりであった。聖トメ〔聖トマス〕がそこに残した古いキリシタンの手になる聖母の肖像なのかもしれないし、彼がやってきたときに作られたそれなのかもしれない。しかしながら結論は、キリストの教え



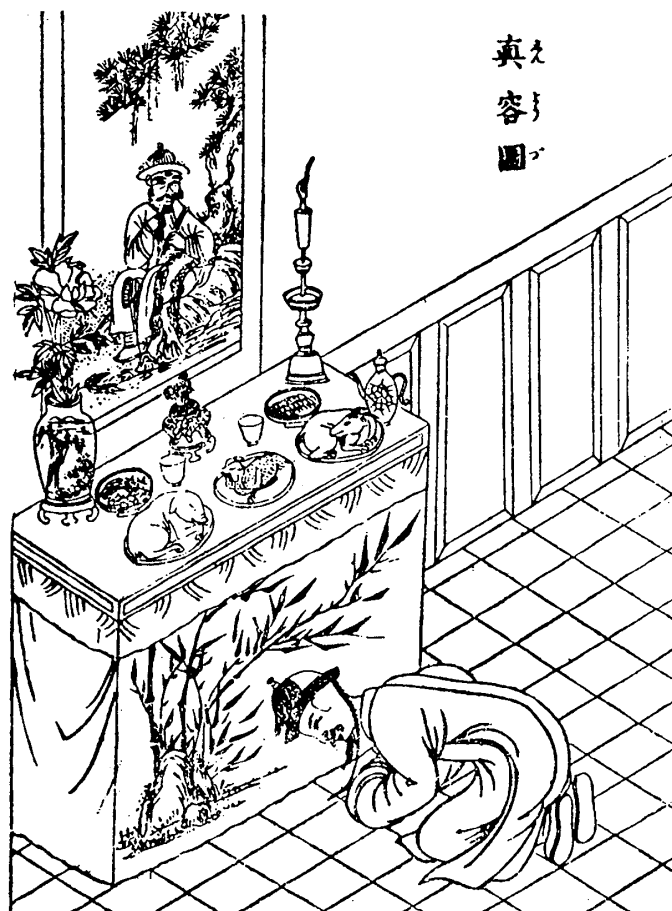
サン・トメ・デ・メリアポール (António Bocarro, *O Livro das Plantas de todas as Fortalezas, Cidades e Povoações do Estado da Índia Oriental* より)

に関するいっさいが忘却されているということであり、ただの異教的偶像にすぎぬという可能性もある。

彼らの^{ほうたい}奉戴する最大の神は天であるので、それを意味する文字はすべてのうちの根本であり筆頭である。彼らは太陽、月、星を崇拝する。また全然尊敬の念もないのにありとあらゆる画像を作る。ただしあるロウティアがある分野もしくは諸分野に秀で、それゆえに彼を崇拝するので、その画像を持つのだという者もいる。同様に、偶像の聖職者の彫像なり画像を持つ者がいるし、個人的な尊敬の念からその他の人々の彫像なり画像を持つ者もいる。こうした画像のみならず、彼らの寺院の内部に積んである石もすべて崇拝の対象である。

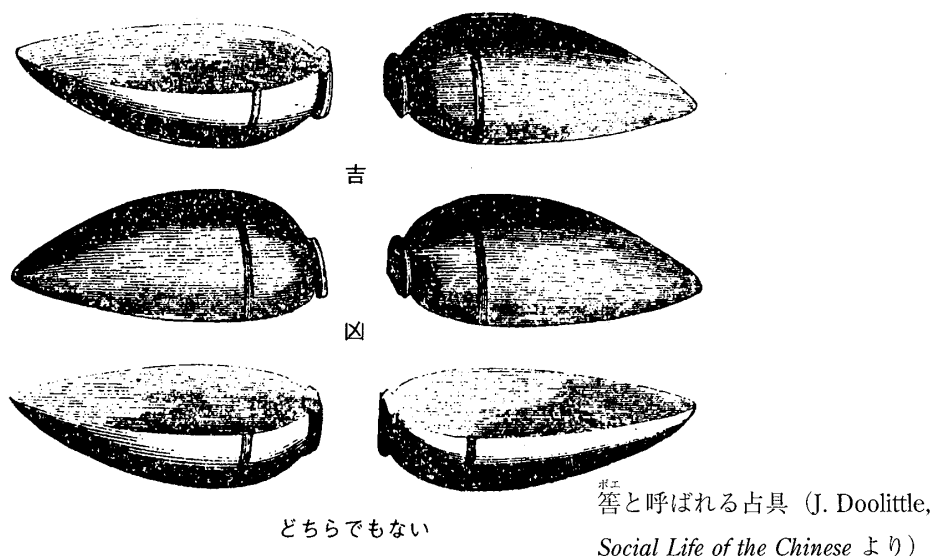
以上の諸神はオミトフォイス〔阿彌陀仏〕⁽⁴⁾と呼ばれ、これへ抹香、安息香⁽⁵⁾、沈香木⁽⁶⁾、およびカイオ・ラケ⁽⁷⁾と呼ばれる別の木、その他の香を供える。すでにふれたあのチャ〔茶〕⁽⁸⁾もこれに供える。誰でも祭壇を持っているが、それは家の門扉を入れてすぐの裏手にあり、そこにみずからの堂々たる偶像を安置する。この偶像に対して毎日欠かさず朝に夕に抹香、その他の香を供える。人の住んでいるところであれば、その内であれば外であれ、いたるところに偶像の寺院がある。航行に用いる船に乗りこむと、さっそく^{とも}艫に祭壇のための場所をしつらえ、そこへ彼らの偶像を運び入れる⁽⁹⁾。

海路にあっても陸路にあっても、何かを敢行しようとするに際しては必ず占具を用い、これを偶像



真
容
図

しんようず
真容図。開祖、亡祖父母、亡
父母の誕生日にその晩年の肖像
画をかけ、供物をそなえて
拝す。(『清俗紀聞』より)



の前で投げる。占具は胡桃を半分ずつに削ったような木片二個であり、その片側は平らでもう片側は丸い。木片はそれぞれ半分に割った胡桃の倍くらいの大きさであり、一本の紐でこれらをつないである。占具を投げようとするとき、彼らはまず自分たちの神と対話を行なう。すなわち、さまざまな言葉でこれに媚びへつらいながら、もし吉兆を出してくだされば、そしてその吉兆において航海がつつがなく運ぶこと、商売がうまくゆくことを示してくだされば、しかるべき寄進をいたしますと約束するのである。くどくどと言葉を連ねた後、占具を投げる。落ちた結果、平らな面が二個とも上であるか、一個が上でもう一個が下であれば、これを凶兆と見なす。すると彼らははなはだ物憂げな顔つきで神々のほうへ向き直り、これらを犬畜生とかなんとかさんざん罵詈雑言で呼ばれる。神々を毒づくことに飽きると、もう一度甘ったるい言葉をかけながらこれを愛撫し、その容赦を願う。いわく「吉兆をお出しにならなかったのも物憂さのあまり、ついあなた方を侮辱し罵詈雑言を浴びせてしまいました。どうか御容赦ください。吉兆をお出しくだされば、くだんの品〔寄進〕はもっとたくさん差しあげます。これは約束でございます」と。彼らが豪勢な寄進をどっさりで行なうのは、そういう約束をする者には必ず功德があると信じられているからである。このように何度も占具を投げてみると、やがて両方とも平らな面が上になって落ちる。これを吉兆と見なす⁽¹⁰⁾。やっと満足した彼らは約束の品を自分たちの神々へ捧げる。

何か重大なことについて占具を投げるとき、吉の卦^{きち け}が出なかったり、船を海に出そうとしているのにその具合がはかばかしくなかったり、それに何か不都合が生じたりした場合によくあるのだが、彼らは神々に襲いかかり、これを水中に投げこむ。ときにはこれを火炎に放りこんだり、少し焦げ目をつけたりすることもある。言いたい放題に悪態をつき、両足でこれを踏みつけ、汚い言葉でこれを罵ることもある。やがて仕事が済むと、奏楽とお祭り騒ぎのなかへ神々を持ち出し、これへお供え物を持ってゆく。

彼らは焼いた豚の頭を上等のお供え物とする。そして鶏^{にわとり}、鶯鳥^{がちょう}、家鴨^{あひる}、米を供える。いっさいは調味されている。さらに大きな壺に入れた酒をこれに添える。これらすべてのものを神々の高覧に供した後、その分を別に取り分ける。すなわち、一枚の平皿に豚の耳の切れ端、家鴨、鶯鳥、鶏の嘴や爪^{くちばし}の先っぽ、さらにごく少量の飯粒を載せたうえ、これをいとも慎重に配置する。この上から酒を三滴

か四滴、壺から何滴もこぼれることのないよう充分に注意しながらふりかけるのである。このようにして一枚の平皿に盛りつけた以上のものすべては、神々に食べていただくべく祭壇の神々の前に置く。そして神々の前に侍り、運んできたすべてのものを食べる。

この人々は悪魔〔鬼〕をも崇拝し、それを我らのあいだで描かれるように描く。彼らの言うところでは、悪魔は善人を悪魔にし、悪人を水牛、牛、その他の獣^{けもの}にしてしまうがゆえに崇拝するのだとか。さらに彼らの言うところでは、悪魔はひとりの師匠を戴いており、これが悪魔へもろもろの悪事を伝授するのだそうだ。もっともこういうことどもは下賤の輩が言うことであり、より洗練された人々は悪魔に悪さをされぬようこれを崇拝するのだと言う。

ある船を初めて進水させようとするとき、彼らの僧侶がよばれて、長く、衣擦^{きぬず}れの音がする絹の衣裳を纏い、生贄^{いけにえ}を捧げに船中へやってくる。彼らは船全体に絹の旗をひるがえらせ、舳^{へさき}に悪魔の彩色像を置き、それに対して数々の拝礼とお供えを行なう。こうして悪魔が船に害を及ぼさぬようにするのだと彼らは言う。彼らは神々に対していろいろな彩色像の描かれた紙と、さまざまな形に裁断した別の紙を捧げる。そしてこれを偶像たちの前で一定の儀式と抑揚の効いた歌唱のうちに焼く。歌唱の最中是一种の小さな鐘〔鈴〕を鳴らす。このあいだずっと食べ物と飲み物がたっぷりとある。

この地には二種類の僧侶がいる。ある僧侶たち〔仏教僧侶〕は頭髪を完全に剃り、頭には天蓋の生地のようなきめの粗い縁なし帽をかぶる。それは平らで後ろが高くなっているが、前は後ろよりほぼ掌^{てのひら}ひとつ分だけさらに高く、凹凸型の銃眼のように仕立ててある。その衣裳は、俗人風^{じきどう}に仕立てられた白い寛衣である。彼らは僧院に住んでおり、その囲いの内側には食堂や僧坊があり、爽やかな緑樹が生い茂っている。民衆がみずからの葬儀や生贄の儀式のため平素利用している別の僧侶たち〔道士〕がいる。彼らは頭髪を蓄え、絹もしくはサージもしくは亜麻でできた、俗人風の長く黒い寛衣を着る。彼らは目印として、握った手を模して巧みに彫られ、黒漆で光沢を出した一個の木片を頭のでっぺんで頭髪に結うている。こうした僧侶はなんぴとも妻帯せぬことになっているが、実は不徳で不浄な暮らしをしている。

一年の朔日——それは三月の新月の日にあたる——に、彼らは全土でたいそう盛大な祝祭を催し、相互訪問を行なう。ことに身分ある連中は豪華な饗宴のうちに過ごす。国を規律正しく統制し統治する術^{すべ}、日常の交際術にかけてはあれほど洗練されているこの国の人々であるが、その異教的愚昧^{ぐまい}さ、おのが神々との関わり方と偶像を崇めるさまは、まったく野獣さながらである。だから、ここに述べてきたことのほかにも、彼らのもとには異教的な作り話や嘘八百がたくさんある。人間が犬に姿を変え、後にまた人間に姿を変えたとか、蛇が人間に身をやつしたとかいうのがその例である⁽¹¹⁾。そのほかにも無知蒙昧なことは数えあげればきりが無い。

しかしながら、この地の人々にはわが信仰へ改宗するための大いなる素質が内在するのである。そう述べる根拠はふたつある。ひとつに、彼らはみずからの神々や師父〔特に仏教僧侶を指す〕にほとんど信頼や敬意を抱いていない。したがって、彼らにひとたび真理が体得できれば、きっとこれを重んずるに相違ない。こういう素質は、インディアのあらゆる地方に住むいかなる人々にも見いだし得ぬものである。いまひとつに、彼らは喜んで真実の教義に聴きいり、並々ならぬ注意深さをもってそれに耳を傾ける。これは、私がおりにふれて公道で説教したとき、彼らの中で幾度となく体験したところである。説教を始めると、そこへ人々が、目新しいもの、新奇な衣裳でも見るかのような目つきで集まってくる。やがてあたりは通行の余地もないほどの人だかりとなってしまう。私は多くの人々と出逢うたびに説教をしたが、一同喜んで私の話すことに聴きいり、疑問の点はよく筋の通った質問にまとめ、私の答えに満足すると、「おっしゃることはまことにすばらしい。こんなことを言う人に出

逢ったのは初めてだ」と言うのであった。聴衆との対話においても個人的な会話においても、つねに得られた返答は同じであった。

某日、私はある寺院に入り祭壇に近づいた。祭壇には何個かの石が積み上げてあり、それに向かって礼拝をしている者たちがいた。彼らはみずからの神々などほとんど尊重しない、理のあるところに服するであろう人々であると、そう信じた私はくだんの石ころを床に放りだしてやった。すると数人が私に激しく突きかかり、憤激して「なぜこんなことをしたか」と詰め寄った。私は穏やかに彼らのほうへ歩み寄り、微笑して言った。「なぜあなた方はこうも分別がないのでしょうか。こんな石ころを拜むとは」と。彼らは私にこう尋ねた。「君らこそこの石を拜もうとしない。それはなぜか」と。そこで私はこう教えた。「あなた方はあんな石ころよりも優れているのです。なぜかといえば、あなた方は理性を駆使し、両足、両手、両眼を使って、石ころなどにはできぬことができる。より優れているのがあなた方である以上、御自身を卑しめ軽んじてあんなくだぬものを拜んではなりません。御自身の品性を忘れてはなりません」と。彼らは「おっしゃることは大いに道理だ」と答え、石ころを床に放置したまま、私を伴っていっしょに外へ出た。つまり私は、彼らの中にキリスト教を信ずるにふさわしい徴候というか素質を見いだしたのである。このことに関してはさらに好都合なことがある。インディアのあらゆる人々がするような食べ物の好き嫌いを彼らは全然しないというのがそれである。あらゆる食べ物のうちで彼らは豚をもっとも好むから、彼らがイスラム教徒になることはほとんどあり得ない。というわけでチナ全土においてイスラム教徒のチナ人はひとりも見られない。次章において明らかにされるように、チナにイスラム教徒がいるにはいても彼らはチナの出身ではない。

- (1) 『新約聖書』「ローマの信徒への手紙」第一章二〇節「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」(新共同訳)が変形されて引用されている。
- (2) イエスの十二使徒のひとり。おそらく三世紀前半に成立した外典『トマス行伝』によれば、神の導きによってインドに布教を行ない、西暦七二年、そこで殉教を遂げたという。彼が殉教した地は古い伝承によると、インド亜大陸南西部、マドラス近郊のメリアポールとされ、そこには聖トマス聖堂が建てられている(森安達也『キリスト教史 Ⅲ 東方キリスト教』二二六～二二七頁)。
- (3) 聖トマスがインドから中国へ赴いて福音を伝えたという説は今日では否定されている。トマスはシリア語を話す諸教会の宣教者だったので、同じシリア語を話す信者のいた中国およびインドの布教者でもあったのだろうと考えられた結果、これらの地方に住み、ローマ・カトリックの教えを奉ずるキリスト教徒はすべてトマスの教えを継ぐ者であるという伝説がつくられたのであろう。中国在来のキリスト教徒は実際はネストリウス派の信徒であった(矢沢利彦『中国とキリスト教』五二～五三頁)。
- (4) 原綴り Omitoffois.
- (5) 原語 benjoi. 学名 *Stirax benzoin*, Dryander から採取された香薬 (S. R. Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, I, pp.112-113)。安息香については、リンスホーテン『東方案内記』五〇〇～五〇一頁参照。
- (6) 原語 aguilla. 学名 *Aquilaria Agallocha*, Roxb. から採取され香薬として用いられる木 (Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, I, pp.112-113)。沈香木については、山田憲太郎『香料の道——鼻と舌西東』一五七～一九三頁参照。
- (7) 原綴り caio, laque. 二語に切り離されているが実際は一語に綴られるべきであることについては、第一章注3参照。
- (8) 原語 ocha. 語頭の o は男性名詞のための定冠詞と思われるので正しくは二語に切り離されるべきであろう。
- (9) これは大洋を航海する船にのみ該当することであり、より小型の河川用の船では、祈禱所または祭壇はふつう

触先にあり、そこで香を焚き生け簀を供える (C. R. Boxer ed., *South China in the Sixteenth Century*, p.214, note 4)。

一五四九年一月五日付、鹿児島発信、フランシスコ・ザビエルのゴアのイエズス会員宛て書翰には、彼の日本までの航海の様子が描かれているが、そこには中国人船員による船内の偶像崇拜が次のように叙述されている。

「この航海中、二つのことで深い〔悲しみ〕を感じました。〔中略〕第二は、船に運び込んだ偶像を船長や異教徒たちが絶えず熱心に崇拜し、生簀を捧げているのを見ながら、それをやめさせることができませんでした。彼らはたびたびおみくじを引いて、私たちが日本へ行けるかどうか、また航海に必要な順風が〔日本へ着くまで〕吹き続けるかどうかを占っていました。彼らが私たちに言い、また〔自身〕信じ込んでいるところでは、おみくじは善い運勢が出たり、悪い運勢が出たり、まちまちでした。

私たちがシナへ向けて航行している途中、マラッカから一〇〇レグア (五六〇キロ) のところで、一つの島に着きました。〔そこで〕シナ海の大暴風雨と大波に備えて、舵やその他の必要なものを用意しました。〔この作業が〕済むと〔船長たちは〕たくさんの生簀を捧げ、偶像の機嫌をとり、幾度も礼拝して、順風が吹くかどうかおみくじを引きました。よい天気になるからこれ以上待ってはいけないう占いが出ましたので錨を上げ、帆を張って〔出帆しました〕。皆大喜びで、異教徒たちは船尾に恭しく運び出した偶像に灯明をあげ、香木を焚いていましたし、私たちは天地の創造主なる神とその御子イエズス・キリストにお頼りして、その愛と奉仕のため、聖なる信仰を広めるために日本へ行く〔ことを喜んでいました〕。

航海の途中で異教徒たちは、この船が日本からマラッカへ〔無事〕帰航できるかどうか、おみくじを引いて占いはじめました。おみくじは日本へ行くことはできるが、マラッカへは帰れないだろうと出ました。それで疑心暗鬼となり、〔直接〕日本へは行かずにシナで越冬し、一年間過ごすことにしたのです。この航海で私たちが耐え忍んだ苦痛を考えてみてください。船乗りたちはおみくじで悪魔が言うことにしか従わないのですから、私たちは悪魔とその族の意向に従って、日本へ行くかどうかを決めなければならないのです」(河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』四六五～四六六頁)

- (10) これより少し前の文章を読めば明らかなように、クルスの記述は矛盾している。ドゥーリトルの挿し絵を参照のこと。実際は、二個とも平らな面が上に出た場合は兇でも吉でもない (indifferent) 験であり、二個とも平らな面が下になった場合は兇 (negative)、一個の平らな面が上、一個の丸い面が上に出た場合は吉 (affirmative) の験であるという。このような運命判断については、cf. J. Doolittle, *Social Life of the Chinese*, II, pp.107-108. 可児弘明は、香港近辺の水上生活者に関する記述の中でクルスの記述にあるような占い具に言及している。蛤形に削った竹の根や木を左右ふたつに割ったもの。これを落として貝殻でいえば背にあたる丸い面が出ると「陽」、内側の平らな面が出ると「陰」とする。坪州の船上生活者はこれを二個同時に落として、その組み合わせが陰・陽ならば、「好」すなわち吉とする。陰・陰ならば「不好」すなわち兇であり、陽・陽ならば吉と兇の中間で「嘛」とする。これを三度試みて神意を確かめるのである (『香港の水上居民——中国社会史の断面』一二〇～一二一頁)。ドゥーリトルの記述とは一致しないことに注意。岡田英弘もこの占い具すなわち筈に言及しており、彼によれば、「筈の一方がうつ伏せになり、もう一方が仰向けになれば『聖筈』^{シウボエ}とって吉。両方とも仰向けになれば『笑筈』^{チウボエ}で、神様が笑って相手にしてくれないという意味だから半吉半凶。両方とも下向きになれば『陰筈』^{イムボエ}で、神様が口をきいてくれないということだから凶である。これを三回繰り返し、三回とも『聖筈』が出なければ願いは聞き届けられないとされる」(『妻も敵なり——中国人の本能と情念』一五六～一五七頁)。占い具の落ち方による吉凶判断に関する限り、この記述はドゥーリトルのそれと一致している。また、福建省泉州の関岳廟で今も筈が盛んに行なわれていることを窪徳忠は観察している (『道教の神々』二六～二八頁参照)。

- (11) 幼稚なものながら中国人の輪廻転生観にふれた記述であるが、ラックが説くように、メンドーサの著書においてはかかる輪廻転生の概念は見られず、中国的な靈魂不滅の観念はかなり紋切り型のキリスト教信仰にすり替えられてしまっている (Donald F. Lach, *Asia in the Making of Europe*, I, p.785)。メンドーサは次のように記述して

いる。

「かれらは靈魂が天から由来したものであること、天がこれに永遠性を賦与したゆえに終末をもたないものであることを述べ、これを固く信じている。また靈魂が神によって肉体に注入され、その中にとどまっているあいだ、かれらの掟にしたがって生活し、悪事をなさず、隣人をあざむかなければ、天に導かれ、天使となって安楽に、永遠の生を送るであろう、と説く。またこれと反対に悪しき生活を送った靈魂は、悪魔とともに真暗闇の牢獄におもむき、永遠におわることなき責め苦を受けるであろう、と説いている」(『シナ大王国誌』一一九頁)

ここでもメンドーサはクルスを参照したことが明らかであるにもかかわらず、またもや恣意的な資料操作に走っている。福(子宝)、禄(財産)、寿(長寿)だけを人生の究極目的とし、徹底して現世を謳歌する中国人には「永遠」とか「来世における賞罰」とかいった観念はない。このことについては、三田村泰助が次のように述べている。「中国人は、たとえばキリスト教徒や仏教徒が信ずるような、現世とちがった死語の世界の存在を、いっさい認めないのである。かれらにとって、現実にあるものは現世だけであつた。その証となるものは、ひとすじにこの世を生きぬく肉体の生命のみといえる。来世のないかれらには、生命がたえたときが、すべての終わりであることを意味する。中国人が異常なまでに、生命に執着する理由は、ひとえにこの点にあった」(『黄土を拓いた人びと』二三八頁)。人間と動物の断絶を強調するキリスト教の立場からは、生前の行動によって人間が死後、獣に転生するかも知れないといった考え方は受容しがたいものであり、メンドーサはそのような考え方のヨーロッパ人読者への紹介を忌避したのであろう。いうまでもなく、資料操作によってメンドーサがみずからの著述の価値を減じた一方で、クルスがみずからの知見をありのままに書き留めたがゆえにより正鵠を射た記述をものし得た好例であるといつてよい。

第二八章 チナにいるイスラム教徒について。またチナにおいてキリスト教界を作るに伴う諸障害について

チナではさまざまな地方に多少のイスラム教徒⁽¹⁾が散在する。しかし彼らは国籍からいうとチナ人ではなく、サマルチャン〔サマルカンド〕という国に出たモゴール人〔ムガル人〕の末裔である。サマルチャンとは、その首都がそう呼ばれていることに由来する。こうしたイスラム教徒はチナへ渡来した後、次のような次第で散り散りになっていった⁽²⁾。

本書の冒頭ですでに言及したモゴール人は、国境地帯を接するチナ人と、沙漠地帯の介在にもかかわらず、交渉していた。モゴール人の中にいたある富裕な商人は、このようなチナ人との交渉時代、自分たちが交易していた都市に住むひとりのおもだったロウティアと懇ろに交際を重ね、きわめて親密な友誼を結ぶにいたった。彼は故国から持参した物資から豪勢な贈り物を準備し、ロウティアの意を迎えようとしたのである。このイスラム教徒は、このロウティアと結んだ神秘的で親密な友誼に縋って、彼にマファメデ〔マホメット〕の宗派について説くようになった。そしてその宗派の栄光を高め、マファメデに関する大仰なことどもをいろいろ述べるようになった。そのあげく、彼はロウティアがイスラム教徒となるよう勧めるにいたり、ついにはロウティアを口説くことに成功した。それに伴ない、ロウティアとその一家は盛大な祝賀のうちに割礼の儀式を行なった。さらに彼は「これより先、わが邸に豚肉を持ちこんではならぬ。また今後、わが邸のなんびとも豚を食ってはならない」と命じた。このロウティアはかのイスラム教徒のいとも忠実な弟子であったから、さっそく市のロウティアたち、および市の住民にもイスラム教徒になるよう説得を始めるありさまであった。多くがそれに迎合し、肯んじなかったのは一部にすぎなかった。みずからの市で多くの人々がこの毒々しい宗派に鞍替えする

のを見たロウティアは、みずからの災厄および破滅になるとも知らず、違反者は重罰に処すという条件のもと、大胆にもその地方一円に次のような新法を布告する挙に出た。すなわち、市中で豚を屠殺してはならぬ、豚はことごとく市外へ放逐すべしというのである。要人や一般人民のうちで改宗に肯んじなかった連中は、^{こわだか}声高に異議を唱え、不平をこぼしはじめた。自分たちのたいそう好む食べ物を奪われたうえ、この地では豚を食うことがわずかに国王以外の誰にも許されぬという破天荒な事態に際会したからである。抗議の声と不平不満とはただちに国王の耳に達した。ために、イスラム教へ改宗したロウティアの某は、その地方で新法を発し、外国人と手を組んで蜂起に踏みきった。ただちに国王は本件への対応策を講じ、キンチャイ〔欽差〕にその他のロウティアたちを付して派遣した。惹起したいっさいのことを審理し、罪ある者を獄に下すというこの事件への善後策をしっかりと講じ、ひいてはこの破天荒な事態を抑えこみ、謀叛に踏みきった者ども全員を罪の軽重に従って処罰するためである。

審理が終わり、有罪者が捕らえられると、この事件のことは宮廷に報ぜられた。イスラム教徒であれチナ人であれこの活動の首謀者はすべて死刑を宣告された。この悪事において大した咎めも受けなかったイスラム教徒はチナの諸地方へ追放されたのだが、今日、イスラム教徒がカンタン〔広東〕に少し、カンシー〔広西〕にも少し、諸地方のあちこちにこれまた少しずついるという事態はここに由来するのである。これらのイスラム教徒たちはチナ全土に分散しているにもかかわらず、彼らが追放されてより今日にいたるまで、ひとりのチナ人もイスラム教徒にはなっていない⁽³⁾。現在も生きている連中は追放された者たちの子や孫であるうえ、チナ女性の腹から生まれてもいるので、イスラム教徒には禁じられているのに、ほとんど皆、豚を食べるし酒も飲む⁽⁴⁾。その理由としてまず母親からの感化がある⁽⁵⁾。次にチナという土地がすでに彼らの故郷そのものであり、さらにはチナ人と交流を重ねてきたこともある。いまや彼らはほとんどイスラム教徒ではなく、マファメデの宗派やその諸慣習をほとんど配慮してもいない。

上述のことすべてを前提とするなら、私は幾人かからこう論難されるかもしれぬ。「チナ人はマファメデの宗派になんの愛着も抱いていない。彼らにはだから、キリストの信仰を受け入れるだけの素質なり気分があるのではないか。また君の主たる目的は、君自身冒頭で述べたように、チナへ赴きキリスト教界をつくることだったのではないか。信仰を説き成果も挙げておりながら、なぜ君はチナに留まることをやめたのか」と。これに対し、私はこう答える。「キリスト教界の形成を阻む、はなはだ大きな障害がこの国にはふたつある」と。ひとつ。それは、かのイスラム教徒をめぐる出来事によってある程度見ることができたように、この国では新奇なことが全然容認されないということだ。ために、この国では破天荒な事態が生ずると、ロウティアたちは必ず妨害を加えて、これを抑えつけ事態が進展しないよう図る。カンタンで次のようなことが起こったのもそうした事情からである。あるポルトガル人が城門の入口を計測しているのをロウティアたちに見咎められたことがあった。彼らはさっそくここに監視員を配し、許可なく立ち入ったり城壁付近を歩いたりできぬようにした。いまひとつ。それは、いかなる外国人もロウティアたちの許可がない限り、チナに入りカンタンに留まれぬことである。ロウティアたちは一定期間外国人にカンタン滞在の許可を与えるが、その許可期限が切れると、ただちに退去するよう働きかける。私ならびに私の同行者たちがカンタンに留まること一ヵ月になったとき、ロウティアたちは街路に告知板を掲げ、私たちを世話したり自宅に収容したりすることを重罰をもって禁じたのは、そういう理由からである。ついに私たちはポルトガル人のナオ船へ引き返すことこそ無難と考えるにいたった。

上述のことに加えて、一般庶民はひどくロウティアたちを畏怖しているので、彼らの許可なくあえ

てキリシタンになろうとする者は皆無であろうし、控え目にみても、あえてそうなろうとする者が多数に上るとは思われない。我らはだから、今のところこの国には定着できず、説教も続けられない。それゆえに実りある成果を挙げること、その成果を維持することもできない。しかしながら、これによれば自由な説教が可能となり、実り豊かな成果も挙げることができるという、そんな方法がひとつあったのだ。しかも犬が説教師に吠えつかず⁽⁶⁾、ロウティアといえども決して説教師に邪魔立てはできないというおまけつきである。それはそのための許可をチナ国王からもらうことだ。そのための許可であるが、次のような手順を踏むことによってそれは得られるであろう⁽⁷⁾。すなわち、ポルトガル国王の名のもとに荘厳な献上品を携えた正式の使節団を派遣する。その大使にはパードレたちが同行して国内を旅するための許しを得るよう努める。そしてパードレたちが武器とは無縁の人物であり、わが宗教的戒律がチナ人の主権なり政体を微塵も侵さず、むしろそれどころか、万人がチナ国王に服しその法を守るようになるための有力な助けとなることを明らかにするのである。チナで布教の成果を収める方策はこれだけであり、人間的に申すならば、これ以外に方策はない。これによらずして宗教家が説教したり望む成果を得ることは不可能である。私はこうした方策を持っていなかったし、上述したようなもろもろの障害に遭遇もした。私がチナを去ったのはそのためであり、私ばかりか、チナ布教という事業をすでに数次にわたって企ててきたコンパニア〔イエズス会〕のパードレたちがチナにおいて実りある成果を得られなかったのもそのためである。

(1) 原語 *mouros*. 古語としては元来「いまだにキリスト教の信仰に改宗しない人」あるいは「異教徒」を意味するが、ここでは単に「ムスリム」すなわち「イスラム教徒」を意味する。

(2) 中国におけるイスラム教徒の起源について、セメードは次のように記述している。

「彼らがチナに入国してから八〇〇年になるが、そもそもの始まりは、チナ国内の反乱鎮圧のために、国王がトルケスタン〔トルキスタン〕に住む彼らに救援を求めたことにある。このとき、すばらしい手柄をたてたので、在留を希望したものは、チナ人と同じ地位を認められ、国内に留まるようになった。その後彼らの数は増加の一途をたどり、今日では何万人にもものぼるようになった。その後も（三〇〇年もまえのことになるが）フンブ〔洪武帝〕がタルタリア人と戦ったとき、彼をたすけてタルタリア人にあつたために、チナ人の間で前にもまして評判をよくし、役人として採用される地位を勝ち得た。三年ごと、あるいは五年ごとに外国から使節団が国王への贈物を携えて入国することはすでに述べた。このものたちはすべてがモーロではあるけれども、種族もちがえば国もちがい、そのままチナに居残るものはめったにない」（『中国キリスト教布教史 二』五一六頁）

(3) この見解はクルスの誇張ではないと思われるが、日本およびシナ通として知られるイエズス会士ジョアン・ロドリゲスは、「シナ人は自分の律法と習慣には大昔からすこぶる頑固であって、それ以上にすぐれたものはこの世にはないと思っているのである。そのようなわけだから、モーロ人〔イスラム教徒〕はシナに千年近くも住んでおり、また彼らの律法は寛大であらゆる悪を容認するけれども、土着のシナ人は誰一人としてモーロ人にはならないし、またユダヤ教徒にもならないのである」（『日本教会史 下』二四九頁）と述べている。明代のイスラム教ならびにシナ在住のイスラム教徒については、傳統先『中国回教史』一一八～一四三頁、セメード『中国キリスト教布教史 二』五一五～五一六頁参照。

(4) 中国におけるイスラム教徒がムスリムの掟をあまり守らないことについては、セメードも次のように記す。

「モーロ〔イスラム教徒〕たちは国王の許しを得て寺院を公然と維持している。自分たちの掟を彼らはあまり正確には守らない。文の学位を得て公職についたものは、簡単にこの掟をふみにじるし、この掟を説教したり、広めたりしようなどとは思わない。自分たちだけでかたまり、仲間どうしで結婚する。自分たちの息子のためにチナ人の嫁をむかえることはあるが、娘をチナ人にめあわすことはない。既に述べておいたように、チナでは妻は

夫に従うことになっているからである。モーロの家に嫁いだ異教徒の女はモーロになり、異教徒の家に嫁にゆけばモーロの女は異教徒になるのであるが、このあとの方のことをモーロたちは好まないわけである」(『中国キリスト教布教史 二』五一五頁)

- (5) ロウレイロはこの箇所を *por causa dos mais* と読むのだが (Frei Gaspar da Cruz, *Tratado das coisas da China*, ed. Rui Manuel Loureiro, p.258) この校訂では意味は通るまい。初版本には *per rezam das mais* とあり、*mais* が *mães* (*mãe* の複数形) の誤りである (印刷ミスによって鼻音記号が落ちた) と考えればすっきりと意味が通ると愚考する。一六世紀以前のポルトガル語で *i* と *e* との交替現象はふつうに見られる (José Joaquim Nunes, *Compêndio de Gramática Histórica Portuguesa. Fonética e Morfologia*, p.73)。

- (6) 原文 *sem cão ladrar a pregador*. このおもしろい表現は直訳しておくが、むしろ「何者にも邪魔されずに」あるいは「安心して」の意味であろう。

- (7) イエズス会員ベルシオール・ヌーネス・バレットは、シナに入国しここに福音を宣布するための方策を初めて具体的に記述した宣教師のひとりである。一五五五年十一月二三日付、「チナの港」(当時ポルトガル人の根拠地があったランパカウであろう) 発信、ゴアのコレジオの修道士たちへ宛てた書翰において、中国布教を開始するための方策にふれ、クルスと同様、ポルトガル本国から明国皇帝への大使派遣を勧めている。ヌーネス・バレットは「この地で経験したことから中国人の改宗を実現するためにはふたつの方策があるように思われる」と前置きして次のように述べる。

「第一の方策はより無理のないやり方である。すなわち本国と交渉して当国へ大使を派遣してもらうよう要請するのである。そのねらいは、彼我間に友好、権利関係、協定を確定し、イエズス会のパードレが大使とともに国王のいるところへ行けるよう図ることにある。国王は当地から二〇〇レグアの彼方に——おおむね河を経由するのだが——いるといわれる。大使がカンタンに到着した後、その知らせを国王へもたらすまで一年近く待機せねばならないが、その間、パードレはチナの言葉と法律の知識を得よう努める。やがてパードレは大使に随行し、国王のもとへ赴いて、聖務を執行したり慈善の業に勤しんだり隣人の教化事業に従ったりするための許しをもらうよう交渉する。その間も言語の習得を怠らぬようにする。やがてパードレの人徳が広く知れわたるところとなれば、大使はパードレとの連名で国王に請願し一種の鑑札を下賜してもらう。その鑑札さえあれば、改宗を希望する国王の臣下たちはいかなる醜聞も圧迫も蒙ることなく、自由にわが創造主の御法を受け入れるようになるであろう。さらにまた、いかなるマンダリンも為政者もその行為に妨害を加えないであろう。それどころか、信仰を受けいれようとする者をしかるべく庇護してくれるであろう。この方策によらぬ限り、国王もマンダリンも、人々がわが信仰の道理に耳を傾けることを決して許さないであろう」(Raffaella d'Intino ed., *Enformação das cousas da China. Textos do século XVI*, pp.141-142)

第二の方策。こちらのほうは人間的な手立てにもとづくものではなく、人間の意思を超えた何かが必要となる。まずイエズス会の司祭ふたりがふたりの通訳を連れて広東に入る。彼らは船が去った後も、笞打ちの刑に処される危険を冒してそのまま残留し広場や家々でわが至聖の信仰の宣布を開始する。よしんば投獄されても、屈せず一貫してデウスの御言葉を口外する。「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて存らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし」との信念を抱いて、幸せのこと、災いのこと、慰めのこと、苦しみのこと、あらゆることにおいて創造主の御法の宣布に努めるのである。その目的の達成のため、私バレット師自身がこの地に残りたかったのだが、諸般の事情はこれを許さなかった。そこで私は同僚のイルマンひとりを言葉の学習のために当地に残そうと考えたが、為政者の許可なくそうしたことを実行に移す勇氣はなかった。土地の人々も、そのような許可は与えられまいとの意見であった。当地に残留することを願う請願書提出の道はこうして断たれた (*ibid.*, p.142)。